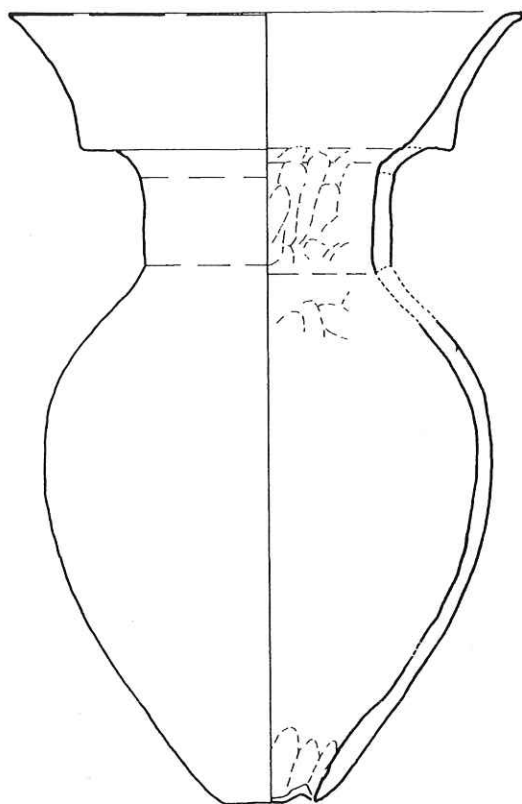


こ づか こ ふん  
小 塚 古 墳

くまもとけんたま な ぐんでんすいまちおおあぎへ た みじょう ひら  
熊本県玉名郡天水町大字部田見城ノ平に所在する小塚古墳発掘調査報告



1998

天水町教育委員会



# 序 文

平成8年度県営三ノ岳地区一般農道整備事業により、丘陵部に道路が整備・拡充されることは、ミカンを基幹産業とする天水町にとって、大きな喜びであります。

戦後天水町では、人力で山を開墾し、ミカンを植え、不便な丘陵を生活の糧とするために、大変な労苦を強いられてまいりました。

三ノ岳地区に、一般農道が整備されることは、先人が強いられた労苦を緩和して、若い人たちが、農業に夢を託し得る環境を整えることと考えます。

しかし、農業環境を整えることのみで捉われて、大事なものを失ってしまわないように、常に心に戒めを持つことが肝要でありましょう。

今回、一般農道整備事業に伴い、小塚古墳を発掘調査することになりました。

しかし、現存の墳丘部を、極力損わないように路線が決定されたため、小塚古墳の墳丘本体は、破壊から逃れることができました。

農業環境の整備・開発と文化財の保護という相反する問題が、天水町の将来を考える上で非常に大きな意味を持つと考えます。

ここに報告する発掘成果が学術的研究のみならず、広く町民及び県民の皆様を活用され、後世の天水町民の文化遺産として益することを祈念してやみません。

最後に、発掘調査を行なうについて多大な御協力を頂いた、熊本県農政部、同玉名事務所耕地課、同教育庁文化課及び貴重な御助言を頂いた諸先生方や、発掘作業に従事して下さった方々に心よりの感謝の意を表します。

平成10年3月20日

天水町教育長 尾池 昭人

# 例 言

- 1、本書は、平成8年12月～平成9年3月にかけて実施した、熊本県玉名郡天水町大字部田見城ノ平<sup>へたみじょう ひら</sup>に所在する小塚古墳の発掘調査報告書であり、天水町文化財調査報告書第1集である。
- 2、平成8年度県営三の岳地区一般農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。
- 3、調査は、熊本県と天水町の間で、発掘調査に関する協定を結び、天水町が主体となつて行なつた。
- 4、発掘現場での実測及び写真撮影は調査員が行い一部埋蔵文化財サポートシステム、九州航空株式会社に委託した。
- 5、整理作業は田上由佳、中村安宏、森本真代、平野美幸が行なつた。
- 6、出土遺物の実測は埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 7、出土遺物の撮影は、奈良国立文化財研究所の牛島茂氏の手を煩わせた。
- 8、付編として経塚古墳発掘報告書を併録した。再録及び遺物の貸し出しに快く応じて下さった帆足文夫氏及び玉名女子高校の関係者の方々に深甚の感謝の念を表します。
- 9、経塚古墳出土遺物の実測は、熊本県教育庁文化課学芸員、帆足俊文氏の手を煩わせた。
- 10、経塚古墳出土の外装付き短剣を実測するにあたり、X線照射を行なつた。太宰府市文化ふれあい館（太宰府市教育委員会）狭川真一氏、熊本大学教授 尾原祐三氏、菅原勝彦氏、熊本県工業技術センター 木村幹男氏、熊本県工業技術センター 上村誠氏の手を煩わせた。記して感謝の念を表します。
- 11、本書の執筆・編集は中川が行なつた。

# 本文目次

序文・例言

## 第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の方法と経過	2

## 第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

## 第3章 調査の成果

第1節 墳丘	7
第2節 周溝	10
第3節 出土遺物	16

## 第4章 まとめ

付編

「経塚古墳発掘報告」	27
報告書抄録	32

# 挿図・表目次

第1図 周辺遺跡地図	4
第2図 墳丘測量図 (平成9年)	8
第3図 墳丘測量図 (昭和26年)	9
第4図 遺構配置図	11
第5図 土層断面図 1	13
第6図 土層断面図 2	14
第7図 土層断面図 3	15
第8図 実測遺物出土分布図 1	17
第9図 実測遺物出土分布図 2	18
第10図 遺物実測図 1	19
第11図 遺物実測図 2	20
第12図 経塚古墳出土遺物実測図	31
第1表 周辺遺跡地名表 (天水町周辺の古墳・横穴)	5
第2表 周辺遺跡地名表 (天水町内の遺跡)	6
第3表 出土遺物観察表 1	21
第4表 出土遺物観察表 2	22

# 图 版 目 次

- 图版 1 天水古墳群（仮称）全景
- 图版 2 小塚古墳出土遺物写真
- 图版 3 小塚古墳出土遺物写真
- 图版 4 経塚古墳出土遺物写真
- 图版 5 小塚古墳調査区掘削状況写真
- 图版 6 小塚古墳遺構写真
- 图版 7 小塚古墳遺物出土状況写真
- 图版 8 小塚古墳完掘状況写真

## 第1章 調査経過

### 第1節 調査に至る経緯

熊本県農政部による一般農道整備事業は、農業を基幹産業とする天水町にとって、必要不可欠な事業である。近年、農業を取り巻く環境は厳しさを増し農業後継者にとっても楽観的な現状にはない。農業環境の整備こそ、天水町の将来にとって、焦眉の急であることは言を待たない。

平成元年度より、県農政部によって、国道501号線と県道熊本・鈴麦線を東西に結ぶ、一般農道整備事業が着手され、計画完成時の総延長は10,100mに及び、天水町・玉東町・植木町の三町の農業にとって、産地と消費地を結ぶ動脈の役割を果たすものと期待される。一般農道整備事業の全体計画の内、三の岳地区は平成元年度から平成9年度にかけて、1600mの道路が施設される予定である。

上記の事業に伴い、道路予定地の埋蔵文化財確認調査が、熊本県教育庁文化課によって平成7年8月に行なわれた。

調査の結果、天水町大字部田見城ノ平に位置する小塚古墳の北側の道路予定地に埋蔵文化財が認められ、記録保存のための発掘調査が必要となった。

県農政部、県文化課、天水町の三者で協議を行い熊本県と天水町の間で「発掘調査に関する協定」を結び天水町が主体となって行なうこととなった。

発掘調査にあたっては、県文化課の御指導・御助言を仰ぎながら、天水町の事業として行なった。

### 第2節 調査の組織

調査主体者 <天水町教育委員会>  
 調査責任者 天水町教育長 尾池 昭人  
 調査事務局 <天水町社会教育課>  
 課長・田尻博美 課長補佐・田上靖晃  
 係長・林田義孝 書記・森山博子 倉田恭子  
 派遣社会教育主事 木下昭二  
 天水町文化財 井出公夫 池田近好 西沢邦彦  
 保護委員 平野政治 上土井富雄

発掘調査担当 嘱託職員 中川 裕二  
 臨時職員 中村 安宏  
 発掘作業 丸山ヨシ子 上山敬治 鋤先ふさる  
 丸山慶子 中尾嘉伸 松本節子  
 高森ミヤ子 山本豊 三次 都  
 右田テルエ 長谷川學 中尾タツエ  
 田上カシ子 竹原静子 丸山鈴子  
 徳永幸子 田尻次則 本里文雄  
 西沢サヲエ 田上幸子 西浦文子  
 整理作業 臨時職員 田上 由佳  
 森本真代 平野美幸  
 調査協力 <熊本県農政部農村整備課>  
 課長 白石 武彦  
 農道開発係長 熊谷 博文  
 農道開発係主任技師 米村 広宣  
 <熊本県玉名事務所>  
 耕地課主幹(兼課長) 横山 敏  
 耕地課主幹 浜崎 満  
 耕地課係長 東田 延寛  
 耕地課主任技師 下川 利明  
 <熊本県教育庁文化課>  
 課長 桑山 裕好  
 教育審議員(課長補佐) 丸山 秀人  
 主幹(調査第一係長) 島津 義昭  
 主幹(調査第二係長) 松本 健郎  
 参事 江本直 高木正文 古城史雄  
 文化財保護主事  
 古森政次 高谷和生 木崎康弘  
 山下義満 村崎孝宏 山城敏昭  
 主任学芸員 長谷部善一  
 学芸員 亀田 学 宮崎 敬士  
 帆足 俊文 三木ますみ  
 嘱託 福田 信子 高見 淳  
 肥後考古学会会長 三島 格  
 玉名市立歴史博物館長 田辺 哲夫  
 元玉名女子高教頭 帆足 文夫  
 宇土市教育委員会 高木 恭二  
 (敬称略)

### 第3節 調査の方法と経過

#### 1. 調査の方法

調査対象地区は、小塚古墳の現存の墳丘裾部の北側に道路予定幅で、南北10～15m、東西約45mで調査面積は500m<sup>2</sup>である。

小塚古墳の墳丘主体部は、調査対象地区から外れるため古墳に付随して周溝が存在したかどうか調査の主目的になる。そのため、周溝の存在を念頭に置いて調査を進めた。

##### ①表土剥ぎ

表土剥ぎの前に、ミカンの木の伐採を行い、重機を入れて表土剥ぎを行なった。

現存の墳丘裾部に近い部分は、手掘りで剥ぐために表土を残した。

##### ②調査区の設定

埋蔵文化財サポートシステムに委託して、国土座標軸を基準として、調査区内に5m四方のグリッドを設定した。

南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を付した。

グリッド名は、南北軸と東西軸の交点（5mの正方形の北東隅）のアルファベットとアラビア数字を連記することとした。（例、A1区）

##### ③掘削方法

周溝の有無を調査するために、小塚古墳の現在の最頂点を中心として3本の放射状のトレンチを設定した。

放射状トレンチを掘削して周溝の有無を確認した後に、5mグリッドを基準として調査区を全面的に下げることにした。

##### ④実測の方法

調査区域の北側約20mに経塚古墳があるため墳丘測量は小塚古墳と経塚古墳の両古墳の測量図が必要である。

墳丘測量は埋蔵文化財サポートシステムに委託し、1/200の実測図面を作成した。

調査区全体の遺構配置図は1/100で平板測量した。

調査区内の遺構実測、グリッドの土層断面実測

図は1/20で作成した。

##### ⑤写真撮影

遺構、土層断面、遺物出土状況、完掘状況等の写真は、35mmのカメラを使用して、カラー・リバーサル、モノクロの二種類のフィルムで、調査員が行なった。遺物写真は、奈良国立文化財研究所の牛島茂氏の手を煩わせた。

調査区全体の航空写真は、九州航空株式会社に委託した。

#### 2. 調査の経過～調査日誌抄録～

（平成8年12月2日～平成9年3月18日）

12月2日（月）～12月30日（月）

重機を使用して表土剥ぎ作業を行なう。ミカンの樹根が残っているため、遺跡を傷めないように慎重に作業を進める。

土層観察用のトレンチ設定及び掘削。遺構検出用の放射状トレンチの設定及び掘削。写真撮影、実測作業を行なう。

開墾に伴う攪乱、削平が激しく遺構検出作業が難行する。

1月6日（月）～1月31日（金）

放射状トレンチによる遺構検出で、一定の成果を得たため、5mグリッド毎の掘削作業を開始する。

肥後考古学会会長・三島格先生、元玉名女子高等学校教頭・帆足文夫先生来跡。昭和42年の経塚古墳発掘当時のお話を伺う。

現地調査と並行して整理作業を開始する。

2月3日（月）～2月28日（金）

5mグリッド毎の掘削を進める。検出した溝は3本あるが、攪乱などによって不明な部分がある。各々の溝の性格については更に調査が必要である。

3月1日（土）～3月18日（火）

5mグリッド毎の土層断面を精査し、溝の性格について考察する。3本の溝のうち2本は同一の溝で小塚古墳の周溝であろう。

写真撮影、実測作業などを遺漏なきよう行なう。作業員さんと別れの挨拶を交わして、4ヵ月におよんだ現地調査を終了する。



## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 地理的環境

天水町は、熊本県の北部・玉名郡の南西部に位置し、北側は玉名市、東側は玉東町、西側は横島町、南側は熊本市と境を接する。

天水町の地勢は、東部は金峰山系の二ノ岳（標高685m）、三ノ岳（標高681m）の丘陵部で占められ、西部は横島町との境界にあたる唐人川流域と、町内の北部を西流して唐人川に至る尾田川流域の平野部で占められる。丘陵部では、県内屈指の生産量を誇るミカンが生産され、耕して天に至る景況を示す。さして広くない平野部の一部は干拓によって造成されたもので、水田地帯となっている。

小塚古墳が位置する場所は、三ノ岳の頂上から北西方向に約1.4Kmの距離にあり、細長い舌状の丘陵の突端部にあたる。

この丘陵から周囲を一瞥すると、東南には金峰山系の山並みが広がり、西北には有明海と島原半島が見渡せる。わけても、島原半島の中央部では、雲仙の山々が、噴火活動により様相が一変した姿を見せて、自然の力の偉大さを示している。古墳時代には現在よりも有明海が湾入しており、丘陵の眼下の一面に有明海が広がり、首長の墳墓の造営地としては絶好の眺望を誇っていたものと思われる。

### 第2節 歴史的環境

周辺遺跡地図に示したとおり、天水町内の遺跡の多くは、旧汀線に沿って存在する。

天水町では、尾田貝塚で出土した縄文前期の曾畑式土器が、最も古い遺物である。

次いで、竹崎貝塚、湯の浦貝塚、尾田貝塚では、縄文中期の阿高式土器、野部田東遺跡では、縄文後晩期の御領式土器が出土しており、縄文時代に人が暮らしていたことを示している。

続いて弥生時代に入ると、発掘当時に日本最古の鉄斧が出土した斎藤山貝塚、それまでに類例のない弥生後期の土器が出土し、野部田式土器と命名され

た野部田遺跡などがあり、縄文時代からの暮らしの連続性が見られる。

古墳時代になると、上記の遺跡よりもやや高い丘陵に古墳が造営される。

古墳の規模は、削平等による墳丘の変化を考慮に入れる必要があり、比較が難しいが、今回調査した小塚古墳、同丘陵上にある経塚古墳、さらに約400m東方にある大塚古墳が、規模において傑出した存在であろう。

平安時代の生産遺跡である金糞谷製鉄跡は、玉東町（原倉藤原）との境界線上に位置し、完形炉が発掘されたが、現在は埋め戻されている。

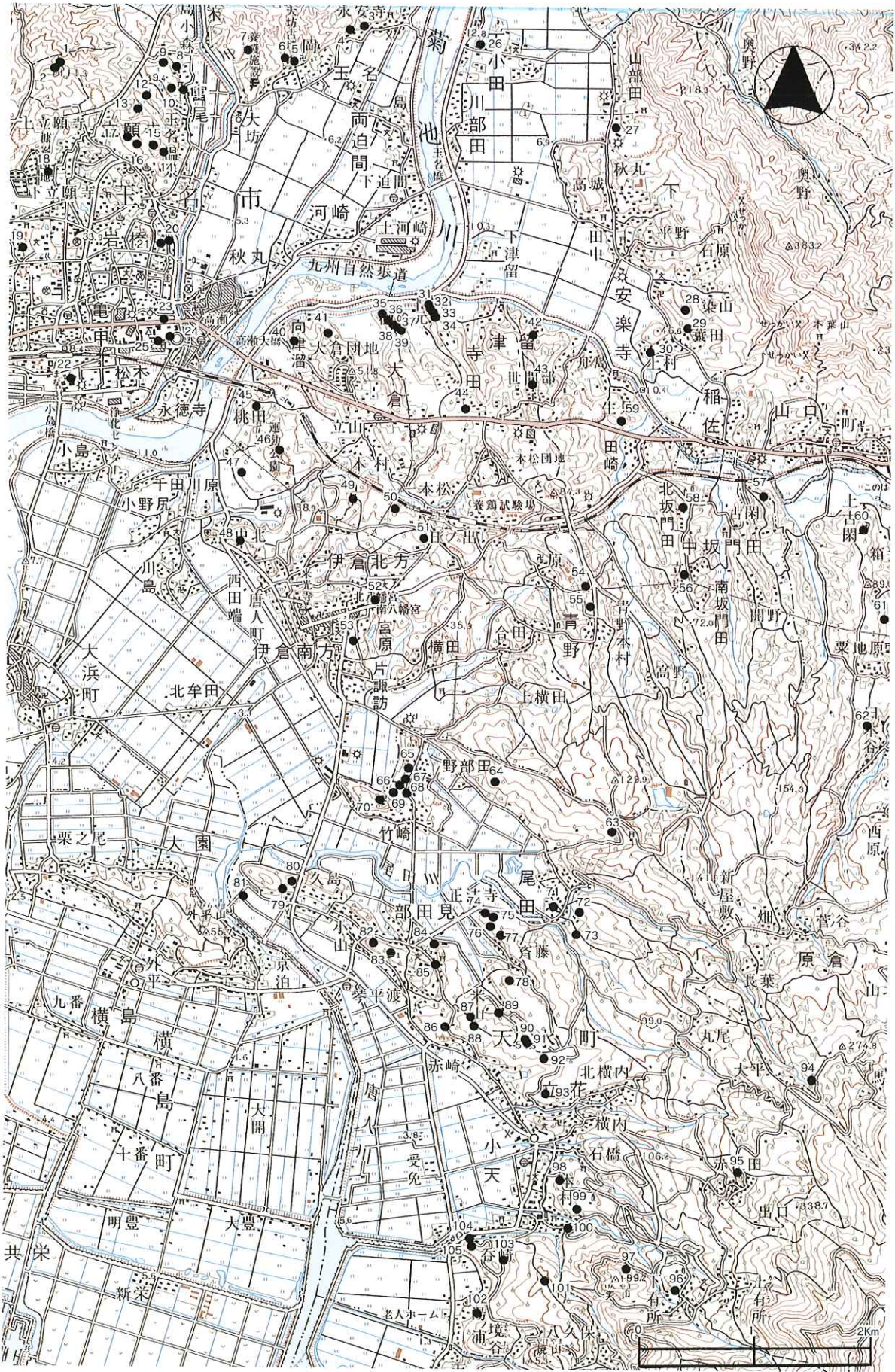
古墳時代から中世までの幅を持つ遺跡としては、立花貝塚があり、土師器、須恵器、中世瓦器などが出土している。

中世の遺跡としては、<sup>げんやま</sup>実山の山腹を利用して造営された、<sup>おあま</sup>小天城がある。

以上、天水町の子な遺跡を時代に沿って概観したが、丘陵部に遺跡が集中しているため、ミカン栽培による開墾などにより、過去に存在していた遺跡で現在は消滅した遺跡もあり、遺跡の性格や内容が不明なものが多い。いくつかの遺跡は、玉名高校、玉名女子高校などの有志によって、発掘調査がなされているが、ミカン栽培の勢いに抗すべくもなく、次次とその姿を消していった。これは、天水町の人々が、縄文・弥生の昔から、丘陵部を利用して生活してきたためであり暮らしの連続性、歴史の連続性が感じられる。

天水町内から目を転じて、周辺の古墳・横穴の分布（第1図・第1表参照）をみると、疎密はあるものの、かなりの数の遺跡を見ることができる。

この分布状況をみると、菊池川下流域の古墳と、天水町の古墳との間に、有明海が湾入していた部分を含む空白地帯がみられる。この空白地帯が、菊池川下流域の古墳を造営した人々と、天水町の古墳を造営した人々の生活圏・勢力圏を分かつものなのか、単なる地勢的要件であるのかが、重要な問題になるであろう。



第1図 周辺遺跡地図

第1表 周辺遺跡地名表(天水町周辺の古墳・横穴)

番号	遺跡名	所在地		備考
		玉	市	
1	蛇が谷古墳A	立願寺	蛇が谷	封土中に舟形石棺、現在消失、鉄器出土
2	蛇が谷古墳B	立願寺	蛇が谷	横穴、13基崖下に北面する
3	永安寺東古墳	玉名(通称 永安寺)		横穴複式、円・三角・舟・馬を描く
4	永安寺西古墳	玉名(通称 永安寺)		横穴単式、円文線刻
5	大坊古墳	玉名	出口	横穴2室、三角連続彩色あり
6	大坊古墳B 参考地	玉名	出口	玉名山西端部、墳丘らしい盛土あり
7	西原古墳 参考地	玉名	西原	玉名山西端部、楕円状の封土
8	浦谷横穴群A	富尾	辻	富尾天満宮北谷、2基
9	富尾浦谷横穴群B	富尾	浦谷	富尾天満宮北谷、東裾10数基、完形が多い
10	富尾原横穴群A	富尾	原	富尾天満宮南西16基、装飾あるもの6基
11	富尾原横穴群B	富尾	原	10数基
12	富尾中尾横穴群	富尾	中尾	
13	富尾いたび横穴群	富尾	居終	13基崖下に北面する
14	冷水塚古墳	富尾	冷水	円墳、冷水台地上、舟形石棺をもつ、現在消失
15	冷水横穴群	富尾	冷水	冷水台地の北、17基が不明
16	小塚古墳	立願寺	大塚	大円墳、保存良好
17	大塚古墳	立願寺	大塚	大円墳、保存良好
18	糠峯古墳	山田	糠峯	独立小山南斜面、箱式石棺・祠とする
19	馬場鉄兜出土地	中尾	馬場	馬場量宅地内より出土、肩庇付、火災で消失
20	岩崎古墳 参考地	岩崎	池田	集落東端、円墳形、天満宮を祀る
21	岩崎古墳	岩崎	池田	菅原神社神体とする、箱式石棺か
22	だいの島古墳	中(通称 だいの島)		玉名駅南、台地南突端、箱式石棺、現在消失
23	伝佐山古墳	繁根木	北	国道208号沿線、径37mの円墳、舟形石棺、遺物多量
24	稲荷山古墳	繁根木	馬場	八幡宮裏、前方後円墳の封土、朝顔形埴輪
25	繁根木箱式石棺(繁根木古墳)	繁根木	馬場	八幡宮東、大正初期方格規矩鏡を出す
26	下小田西丸塚	下小田	陣の裏	上部に五輪塔部分あり、中世墳墓か?
27	山下古墳	山部田	山下	前方後円墳、舟形石棺前後各1、壺棺2基
28	浦方染山横穴群	安楽寺(通称 浦方)		梅林小学校裏手谷合い4基風化する
29	蓑田横穴群	安楽寺	蓑田	稲佐への県道東入り、数基
30	随月古墳	安楽寺	随月	
31	寺田古墳群第1号墳	寺田	宇土	舌状台地北端、封土遺存、内部不明
32	寺田古墳群第2号墳	寺田	宇土	1号の南、径5mの半月形封土、舟形石棺
33	寺田古墳群第3号墳	寺田	宇土	2号の南100m、径16m程の封土、箱式石棺
34	寺田古墳群第4号墳	寺田	宇土	3号の南150m、径25m、処女墳か
35	城が辻古墳群第1号墳	寺田	城が辻	2号の北下段、箱式石棺、人骨、石鏃、やりがんな
36	城が辻古墳群第2号墳	寺田	城が辻	円墳、群中の主墳、完形遺存、内部不明
37	城が辻古墳群第3号墳	寺田	城が辻	2号の南隣に並ぶ、墳丘
38	城が辻古墳群第4号墳	寺田	城が辻	3号南隣に並ぶ、最小墳丘
39	城が辻古墳群第5号墳	寺田	城が辻	南谷を隔てた丘陵、北先端小封土
40	松林寺山古墳	向津留	下	舟形石棺露出、破損
41	飯塚古墳	向津留	飯塚	円墳、保存度良し
42	上津留古墳	津留	小部田	円墳、高台北端に位置、径25mの封土遺存
43	世間部塚古墳	寺田	世間部	「塚さん」という、山伏塚か
44	ナカント塚古墳	寺田	吉丸	集落西南畑中、封土あり、内部不明
45	桃田古墳	大倉	桃田原	集落南墓地、箱式石棺出土伝あり
46	高田古墳	大倉	高田	台地頂上、円墳内部不明、円墳周辺箱式石棺出土
47	中北アカハゲ古墳	伊倉北方(通称 赤禿)		高田古墳下に一封土あり、古墳と思われる
48	中北古墳	伊倉北方	五社	県道に面する南小突端に箱式石棺をもつ
49	岩井口横穴	伊倉北方	岩井口	伊倉台西端崖面、かなり崩壊
50	垣塚古墳	伊倉北方	東垣塚	舟形石棺出土、封土不明
51	伊倉犬塚古墳	伊倉北方	鳥越	現在封土を失う
52	伊倉八幡支石墓(伊倉八幡古墳)	伊倉北方	宮の後	北八幡宮境内、社前に巨石材2個あり
53	院鑰神社古墳	宮原	土井内	円筒埴輪・須恵器・土師器出土
54	青野古墳	青野	本村	明治10年戦死者の墓の伝承あるも疑問
55	青野天神原古墳	青野	天神原	現在天神石祠建つ
56	京塚古墳	中坂門田	京塚	内容不明
57	鑑田横穴群	中坂門田	古閑	数基、1基は保存良好
58	白骨どん古墳	北坂門田	井戸	小円墳、箱式石棺露出
59	田崎横穴群	田崎	檀山	国道208号線沿線
		玉 東 町		
60	箱井古墳	白木	箱井	高台上小円墳、石材露出する
61	上古閑古墳	白木	上古閑	箱式石棺
62	小清水横穴	白木	小清水	2基、風化進む

第2表 周辺遺跡地名表（天水町内の遺跡）

天 水 町 内 の 遺 跡				
番号	遺 跡 名	所 在 地	時代・種別	備 考
63	山神平遺跡	野部田 山神平	弥生・散布地	弥生中期の土器片出土
64	野部田東遺跡	野部田 平	縄文晩期・散布地	御領式土器出土
65	野部田遺跡	野部田 前田	弥生・集落	弥生の標式土器、野部田式土器出土
66	際目貝塚	野部田 際目	弥生・貝塚	
67	野部田石畳道	野部田 際目	交通	旧野部田より伊倉への街道、約110m
68	竹崎遺跡	竹崎 本村屋敷	弥生・埋葬	甕棺出土、現在不明
69	竹崎貝塚	竹崎 山崎	縄文中期・貝塚	阿高式土器、石斧、石錘
70	海奇山遍照院金剛寺跡	竹崎 山崎	神社・寺院	真言宗
71	尾田貝塚	尾田 本村屋敷	縄文・貝塚	會畑式・阿高式土器、人骨、獣骨
72	尾田遺跡	尾田 尾田原、本村屋敷、江原他	散布地	土師器・須恵器
73	下強当石棺群	尾田 下強当	埋葬	石棺群
74	斎藤山貝塚	尾田 正法寺平	弥生前期・貝塚	鉄斧、発掘当時日本最古の鉄器
75	正法寺跡	尾田 正法寺	神社・寺院	板碑2基あり
76	正法寺地下式横穴	尾田 正法寺平	埋葬	一部埋没、内部不明
77	正法寺平古墳	尾田 正法寺平	古墳	箱式石棺破損
78	米山石棺	立花 米山	埋葬	箱式石棺、現在消滅
79	久島貝塚	部田見 久島原	縄文・貝塚	縄文土器、形式名不明
80	久島古墳	部田見 久島	古墳?	参考地・久島山東中腹
81	石塘	部田見 石塘	石塘	加藤清正干拓工事、十八間堤の称あり
82	塚の神西古墳	部田見 徳丸	古墳	箱式石棺消滅
83	塚ノ神古墳	部田見 徳丸	古墳	径15mの円墳、円筒埴輪片散乱、塚ノ神石祠
84	空西寺跡(宏濟寺跡)	部田見 寺原	神社・寺院	
85	迫横穴群	部田見 迫	?	横穴墓、5基
86	経塚西古墳	部田見 赤崎	古墳	径26mの円墳
87	経塚古墳	部田見 城ノ平	古墳	円墳、鏡、劍、管玉、舟形石棺(本文参照)
88	小塚古墳	部田見 城ノ平	古墳	円墳(本文参照)
89	明人 林均吾墓地	立花 米山	墓	明人三官元和7年建立
90	大塚箱式石棺群第1号~第4号	立花 中田	古墳	内行花文鏡
91	大塚古墳	立花 中田	古墳	径60mの円墳、舟形石棺の残骸あり
92	立花横穴群	立花 桜坂	古墳	2基並列、屋根型の天井
93	立花貝塚	立花 本村屋敷	貝塚	土師器・須恵器・中世瓦器他
94	金糞谷製鉄跡	小天 小平	生産	完形炉1基、鉄滓、土器
95	赤仁田遺跡	小天 赤仁田	散布地	弥生土器・石器
96	田尻館跡	下有所 下古閑	館	石垣、大手口堅固
97	小天城跡	突山	中世城跡	山上三名字の一族田尻氏代々の居城
98	柳林遺跡	小天 柳林	散布地	弥生土器・石器
99	延命(円明)庵跡	小天 本村屋敷	神社・寺院	
100	久照寺跡	小天 本村屋敷	神社・寺院	田尻氏菩提所
101	権現山古墳	小天 権現上	古墳	古墳 参考地
102	湯の浦貝塚	小天 部田	縄文中期・貝塚	阿高式土器、石器
103	呑崎の板碑	小天 部田	板碑	供養の碑か
104	呑崎古墳	小天 呑崎	古墳	箱式石棺、現在消失
105	呑崎箱式石棺	小天 呑崎	埋葬	

(熊本県遺跡台帳より転載)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 墳丘

今回の調査対象地区は、道路予定地であり、小塚古墳の墳丘は含まれない。しかし、古墳の外縁部の調査のため、小塚古墳とその北側にある経塚古墳の墳丘を含む地形測量が必要なため、表土剥ぎ以前の地形測量を行なった。(第2図・第3図参照)

地形測量の結果得られた、小塚古墳の現状での大きさは、墳丘裾部の末端をどこに求めるかで、若干の数字の異動はあるが、南北軸が約25m、東西軸が約33mである。墳頂部の標高は52.51mあり墳丘の高さは、現状で約3.5mである。墳頂部の最高点を墳丘の中心点と考えると、南北軸と東西軸の直径が極端に違う。特に、中心点から北側が極端に短いため、墳丘の北側がかなりの削平を受けていることが予想される。同じく、墳丘裾部をどこに求めるかで、数字に異動があるが、経塚古墳の現状での大きさは、南北軸が約39m、東西軸が約50m、墳頂部の標高56.07m、墳丘の高さは、現状で約8mである。経塚古墳も、南北軸と東西軸で直径が違い、中心点から見ると、南側が畑の境界のために直線状に削平されている。両古墳の距離は、墳頂部の最高点と最高点の間で約66mである。

以上が、両古墳の現状での測量成果である。当然古墳造営時の姿は留めていないので、旧地形図との比較や発掘による墳丘の復元作業が必要である。

昭和26年8月5日、現玉名市立歴史博物館館長田辺哲夫氏、現菊水町助役・石原幸男氏が率いる、玉名高校考古学部が、小塚古墳、経塚古墳の地形測量を行なっている。

この当時の測量図と、今回の測量図を比較すると大まかに言って、周辺地形に変化は見られない。両古墳の東側の道路も、拡幅・整備はされているものの、基本的な位置関係に変化は見られない。

昭和26年当時の小塚古墳は、やや歪ではあるが円形を保っている。当時の田辺氏の所見では、直径40m、高さ5mの円丘で、崖断面を見ると盛土ではないとあり、古墳かどうか疑問視されている。自

然の丘陵と考えられたのであろう。

同じく、経塚古墳に対する所見では、直径55m高さ8mの円墳とあり、小塚古墳の円丘と区別されている。

現在の小塚古墳の墳丘は、昭和26年当時とは違い、歪んだ方形のように見える。開墾に伴い円形だった墳丘が直線状に形を整えられた結果であろう。

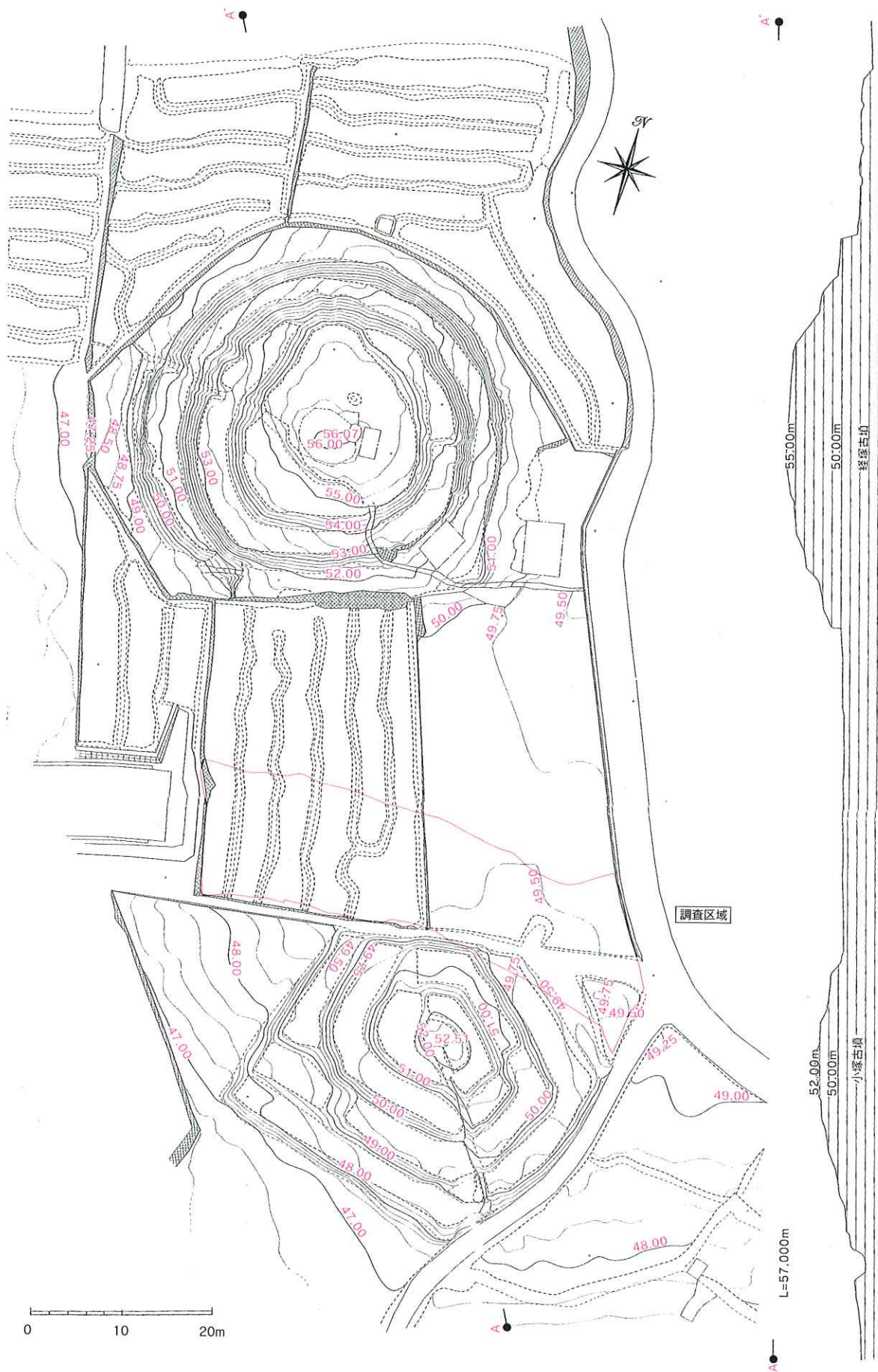
経塚古墳の墳丘の形はあまり変わっていないが、小塚古墳と同様に、墳丘は開墾されている。しかし墳丘の改変の度合いは、小塚古墳よりも小さく、やや歪みながらも、円墳の姿を保っている。

×印は箱式石棺の位置である。当時すでに現物は失われており、田辺氏が地権者の話を基に測量図上に落とされたものである。×印とは別に、経塚古墳の墳頂部に赤い顔料を施した石棺を改葬したという証言も採取されている。しかし、田辺氏は当時の所見で本当に箱式石棺であったのか、疑義を抱いておられる。墳丘に追葬された一族墓的な意味合いも考えられるが、石棺本体や副葬品が全く遺されていないため、想像の域を出ない。

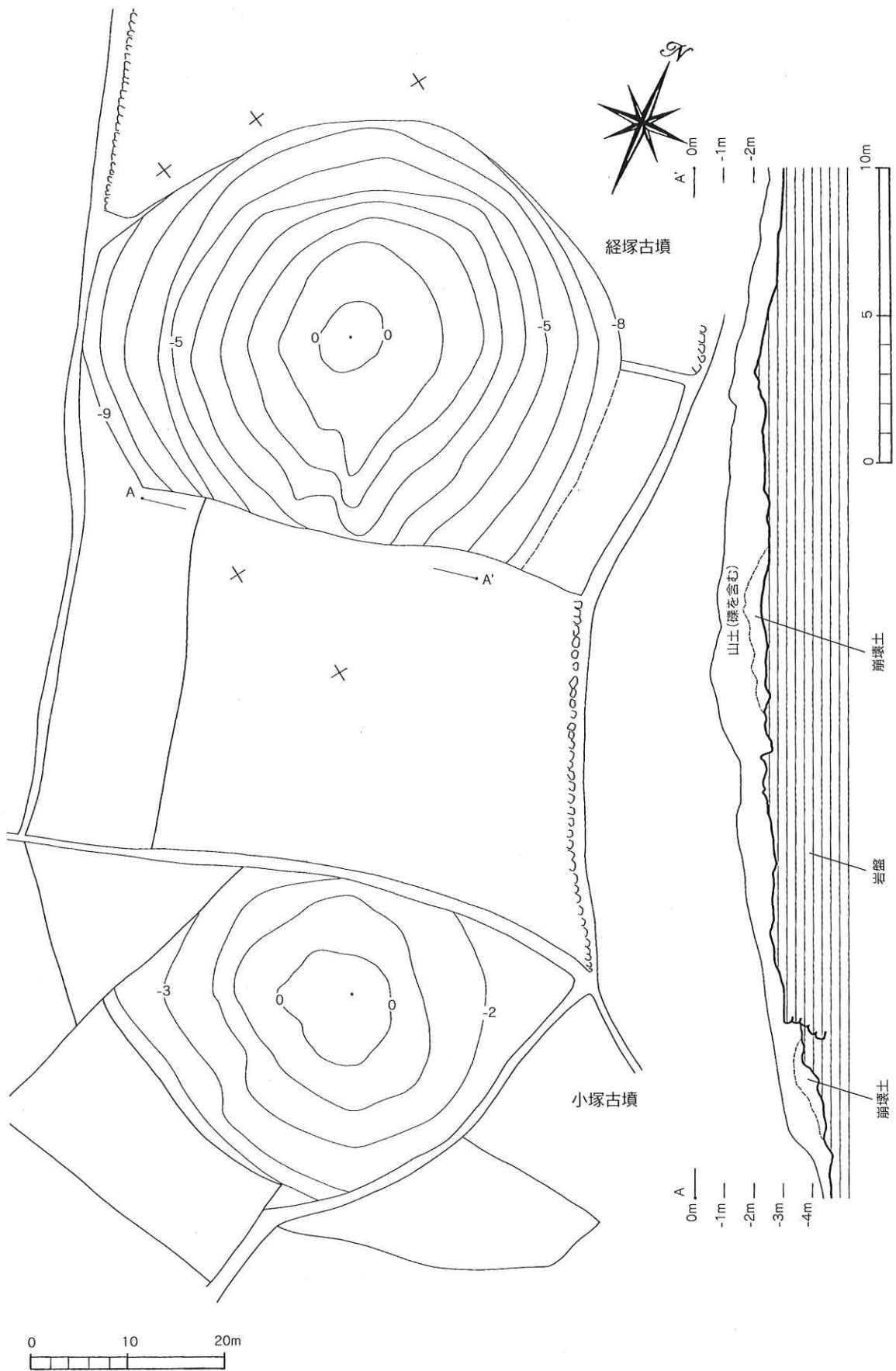
次に、小塚古墳の築造方法であるが、墳丘本体にトレンチを入れることができなかつたため、調査区域と接する墳丘北側をほぼ垂直に切って、土層断面を観察した(第7図参照)。削平されて、自然の丘陵の部分のみが遺されているのか、盛土ではなく、自然堆積の土である。

現状では、築造方法について正確に把握できていないが、盛土をして大規模な土木工事を施した印象は受けない。むしろ、自然の丘陵の高まりをそのまま利用して、盛土をしないで形を整えたような印象を受ける。墳丘の高さが、直径に比して低い印象を受けるのも、盛土が施されていないためではないだろうか。墳丘が削平されテラス状に平坦面が造られている現状では、仮に盛土が施されていたとしてもかなりの土量が失われていることが想像される。

築造方法、主体部の構造ともに、将来の小塚古墳の墳丘本体の発掘の機会に明らかにされることを期待したい。



第2図 墳丘測量図(平成9年)



第3図 墳丘測量図(昭和26年)

## 第2節 周溝

第1節で触れたように、今回の発掘調査の直接の対象地区は、小塚古墳の北側外縁部である。そのため、調査の第一義の目的は、周溝の有無の確認であり、その目的の基に発掘調査を行なった。

表土剥ぎの際に、A7区に埴輪片の集積状況が見られ、溝が検出できた。

A7区の北側はミカン畑のため、溝のつながりを検出するために小塚古墳の墳頂部を中心として、北西方向に放射状にAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチの3本のトレンチを設定して掘削した。

Bトレンチ、Cトレンチの掘削の結果、2本の溝を検出した。

小塚古墳から見て外側にあたる溝は、やや弧を描くため小塚古墳に付随する周溝であろうと考えて、1号周溝とした。

小塚古墳から見て内側にあたる溝は、1号周溝の南側にあたり、墳丘築造以前の遺構か、墳丘の内部施設であると考えて、不明遺構を表すSXを付してSX-1とした。

しかし、グリッド毎の掘削によって、B11区でSX-2を検出したため、SX-1とSX-2が連続する1本の溝である可能性が高くなった。

A8・B8・C8区東側土層断面に約7mの幅で地山の落ち込みが見られる。堆積している土は、殆どが攪乱土であるため、開墾に伴う削平や攪乱を受けている。しかし、約5m幅の実線と破線で示した落ち込みは、溝の残滓と思われる。溝が攪乱されて破壊され、実際の溝の幅よりも拡散されている印象を受ける。

B9区北側・東側断面には、明確な溝の立ち上がりは見られない。しかし、溝の埋土の最下部に見られる黄褐色粘質土が広く堆積し、かなり小さく破壊された埴輪片と思しき遺物が含まれている。溝が破壊され、溝の埋土が広がったものと思われる。

No. 4トレンチの南東隅に、黄褐色粘質土の堆積が見られ、若干の色の違いであるが、地山に掘り込みが見られる。ここが、溝の先端であろう。周囲に、遺物が散乱している状況があり、溝が破壊され

て、遺物が小さく破碎されたことを想像させる。

B10区は、畑の水溜めに掘られた穴の周囲に遺物が分布する。状況はB9区同様、かなりの小破片である。東側断面（B11区西側土層断面参照）には、溝の埋土の堆積が見られ、地山を掘り込んだ痕跡も見られる。北側断面は、溝に直行する形になっていないため、埋土が幅広に堆積している。西側断面には、微かに地山の掘り込みの痕跡が遺っている。南側断面も、殆どが攪乱されているが、溝の最下部の黄褐色粘質土は認められ、地山自体に落ち込みが見られる。

B11区では、SX-2を検出した。平面プランは綺麗な弧を描く。西側断面の立ち上がり部分には攪乱が入っており、地山の掘り込みが微かに遺っている状態が確認できる。

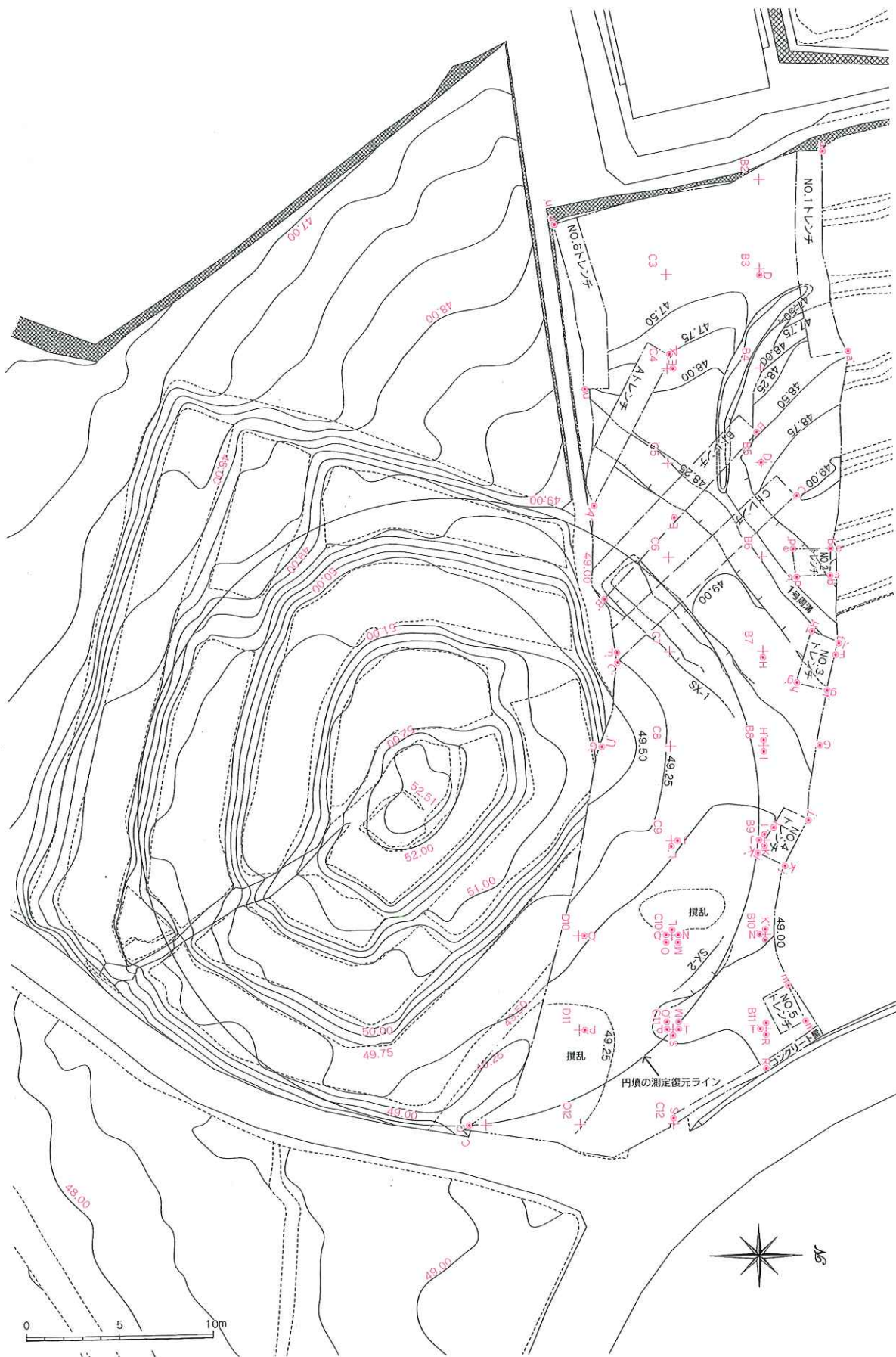
C11区では、西側断面に黄褐色粘質土が微かに遺るが、攪乱のレベルが下がるため、溝の痕跡が遺っていない。この、攪乱が溝の最下部までを削平している状況は、墳丘まで続く。

以上、SX-1、SX-2をつなぐグリッドの土層断面を検討したが、かなり大規模な削平、攪乱を受けている。開墾に伴うものであろうが、溝自体があまり深く掘られていなかった可能性も考えられる。

墳丘測量図でSX-1、SX-2の位置を確認すると、標高50mと標高49mの等高線の間に周溝が巡っていたことが窺える。標高50mの等高線が墳丘の末端部と思われる。とすれば、現存のSX-1の深度が標高49mから20～30cm程度下がっていることから、溝の深度は墳丘末端から1.2m～1.3m程度であり、重機による開墾がなされた場合、溝の上部が削平されてしまう。その削平に伴い、溝の埋土が攪乱されて地山の礫等が混入した状況が8軸、9軸、10軸のグリッドの土層断面の状況であろう。

表土を剥ぐ以前のミカン畑は、調査区のほぼ中央から二筆に別れている。畑の境界線より東側が、SX-1の平面プランの続きが検出できなかったグリッドである。この畑の境界で、削平の深度が異なり、遺構の遺り方やグリッドの土の堆積状況に差が生じたものと思われる。





第4図 遺構配置図

以上のような経緯から、SX-1とSX-2は連続していた同一の溝であり、小塚古墳の周溝であるという結論を下した。

それでは、当初周溝として認識していた、A7区からBトレンチまで続く1号周溝はどのような性格の遺構なのか。

1号周溝は、遺構配置図に示したように、A7区からBトレンチまで、3.5m～4m程度の幅を持つ溝である。掘り込みの状況は、Bトレンチ土層断面図、Cトレンチ土層断面図に見られる通り、地山を掘り込んでいる。

Bトレンチを境として、この溝が南北に広がりを見せ、同一の遺構とは思えない様相を示す。

北側では、Bトレンチ土層断面で、微かな落ち込みを示す細い溝が、緩い弧を描きながら、約1m高度を下げながら、A4区内に達する。Bトレンチでは、微かな落ち込みであるが、B4・B5区北側土層断面に見られるように、高度を下げるにしたがって、幅広く、かつ深くなっていく。

この細い溝の埋土は、Bトレンチでは地山が土壌化したような黄褐色粘質土、B4・B5区北側土層断面では地山が土壌化したような赤褐色粘質土である。かなり小さく破砕された、埴輪片と思しき遺物を含む。

南側で、BトレンチからC5区まで続く遺構のラインは、地山の落ち込みを示す。B5・B6区南側土層断面に見られる地山の落ち込みは、溝の掘り込みの残滓を思わせる。しかし、溝の西側の立ち上がりは遺されておらず、地山が緩やかに高度を下げていく。

Aトレンチ土層断面に見られる地山の落ち込みは約1.5mの幅で約30cm程度高度を下げた後に約20cm程度、急激に高度を下げるが、立ち上がり部分に樹根と思われる攪乱が入っており、溝の掘り込みによる地山の落ち込みか、自然傾斜で地山の高度が下がっていくのか判断としない。

埋土の堆積状況は、B5・B6区南側土層断面、Aトレンチ土層断面ともに、2層に大別できるが、攪乱土である。

1層目の赤褐色粘質土は、地山の礫の混入の多寡

により、分層できる。乾燥すると、地山と誤認するほど固くしまる。遺物は含まない。

2層目の黒褐色土も、若干の地山の礫を含むが、ふかふかして柔らかく、やや汚れている。少量であるが、埴輪片を含む。

この2層の攪乱土がどのような経緯で混入したのか考えてみたい。

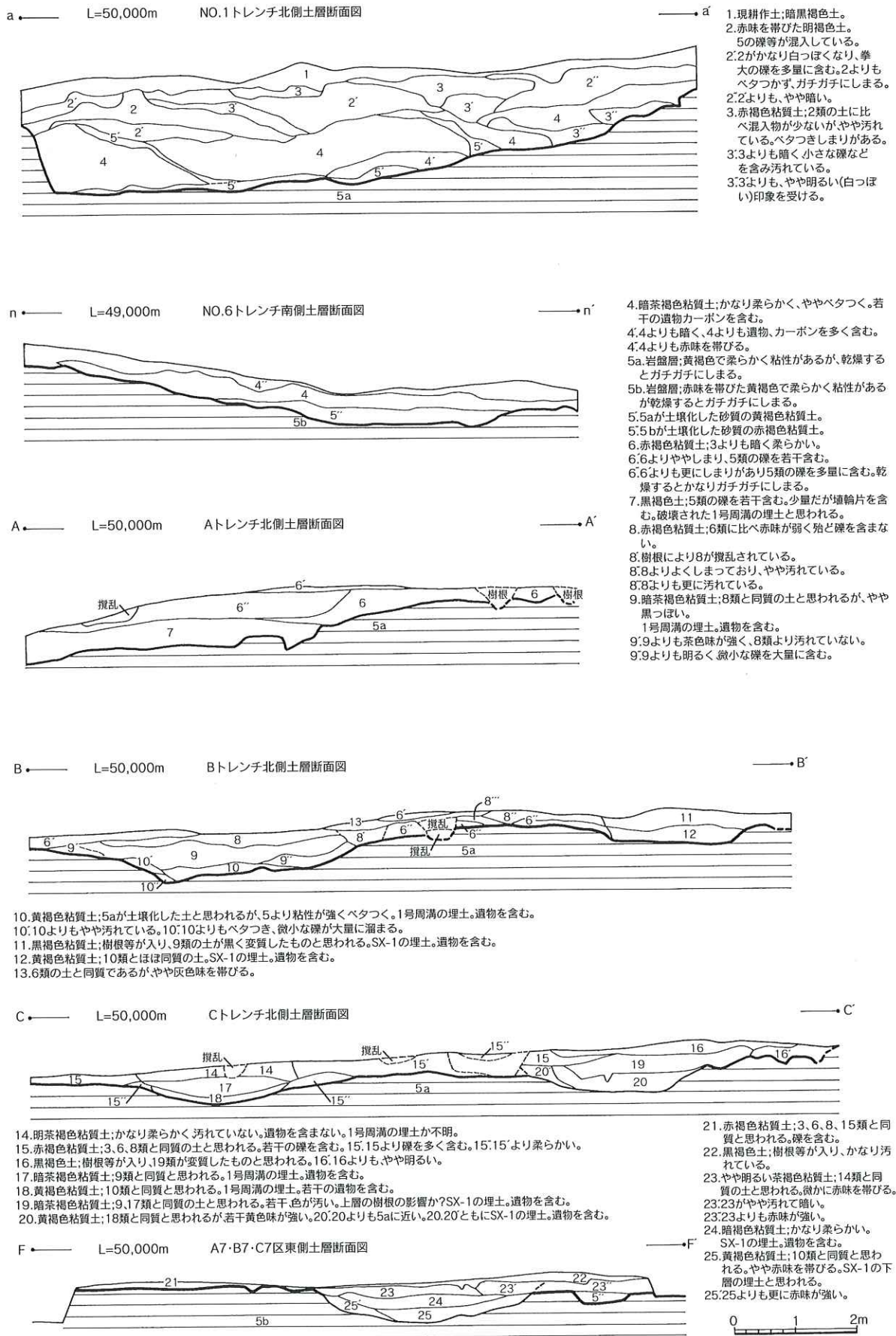
調査区の東側から西側にかけて、自然地形が下がっている。その低地に土を押し込むことによって、ほぼ平坦な畑地を造成したと思われる。調査区の東側にあった、自然層の山土を重機で押し込んだ状況が、2層目の黒褐色土と思われる。更に、重機による削平が下層に及び、地山が高い所では地山を削りながら激しく攪乱した土が、1層目の赤褐色粘質土であろう。その際に、溝の埋土が削平され、攪乱土中に遺物が混入したと思われる。

平坦な畑地を造成することが目的であるため、極端に地山を削り込むことは考えにくい。そのため、BトレンチからC5区まで続く地山の落ち込みは、自然傾斜による落ち込みよりも、地山を掘り込んだ溝の可能性が高いと考える。

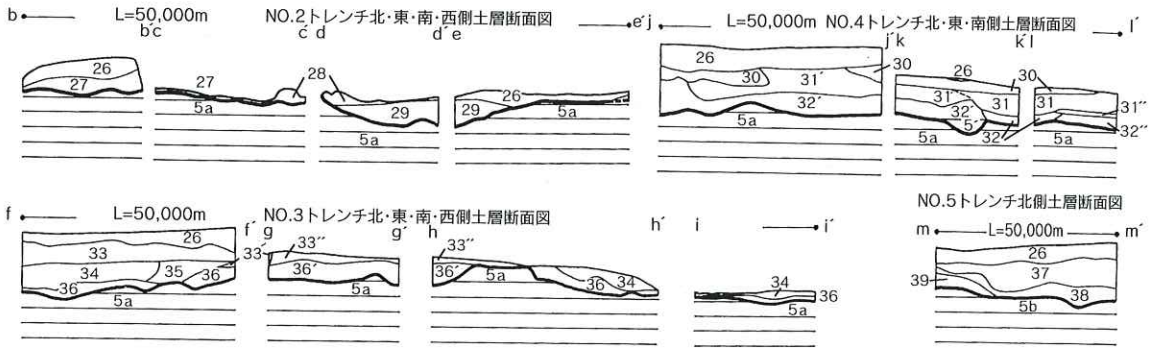
現段階の結論としては、小塚古墳の周溝(SX-1、SX-2)の外側に、二重周溝的に掘られた溝である可能性が高いと考える。また、5軸から西側は地山が下がっているため、BトレンチからC5区までは、片側(南側)だけ掘り込み、地形を整えたことも考えられる。周辺地形を整えた可能性は十分に考えられ、北側の細い溝も、その高低差から、排水溝的な意味を持つ遺構である可能性も考えられよう。また、北側の細い溝については、小塚古墳と経塚古墳の間に、もう一つ円墳があった可能性が考えられる。しかし、A7区からBトレンチまで続く溝とあまりにも様相が違い、レベル差が激しいため可能性は低いものと思われる。

また、1号周溝のA7区からBトレンチの部分には、埴輪がかなり含まれるため、SX-1とA7区の間には、埴輪を並べた、外堤的なものが構築されていた可能性も考えられる。

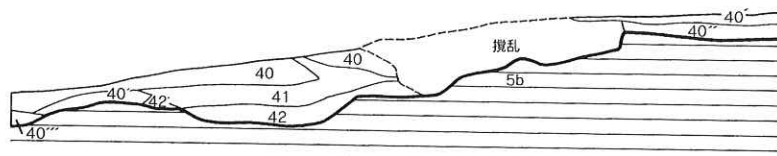
調査区北側のミカン畑に遺構は遺されているため将来、その全貌が明らかになることを期待したい。



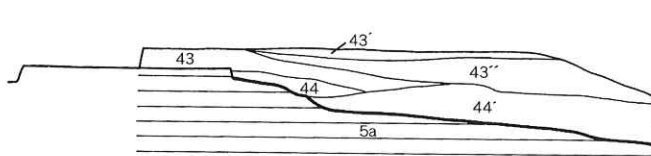
第5図 土層断面図 1



D L=49,500m B4・B5区北側土層断面図



E L=50,000m B5・B6区南側土層断面図



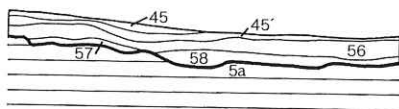
- 43. 赤褐色粘質土;6類とほぼ同質の土。 43.6' とほぼ同質の土。 43.6' とほぼ同質の土。
- 44. 暗茶褐色粘質土;9類と同質の土だが黒っぽい。 44.44より更に黒っぽい。若干の遺物を含む。1号周溝の埋土か?

G L=51,000m A8・B8・C8区東側土層断面図

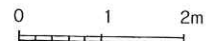
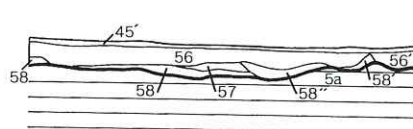


- 45. 現耕作土;赤褐色粘質土がベースと思われるが攪乱されている。 45.45に礫が混入している。46.5'と同質の土と思われるが、1号周溝の埋土か?
- 47. 暗褐色粘質土に礫が混入してかなり汚れている。遺物を含まないため、SX-1の埋土か不明。
- 48. 茶褐色粘質土;19類と同質の土と思われる。SX-1の埋土か? 49.46類と同質と思われる。SX-1の埋土か?
- 50.5'と同質と思われる。51.茶褐色粘質土;黒っぽく汚れる。 51'.径2~3cmの礫を含む。 52.赤褐色粘質土;径5cm程の礫を含む。
- 53.47類と同質と思われる。遺物を含まず、かなり汚れている為、SX-1の埋土か判然としない。位置的にはSX-1の埋土がベースと思われる。
- 54.46類と同質と思われるが、やや赤味を帯びる。
- 55.5'と同質と思われる。SX-1の埋土か?
- 56.やや黄色味を帯びた褐色粘質土;若干の礫を含み、固くしまる。遺物を含む。SX-1の埋土が広く分布した状態と思われる。
- 56.56'がやや汚れる。攪乱か?
- 57.やや黄色味を帯びる茶褐色粘質土;5'と同質と思われるが、やや褐色が強い。
- 58.黄褐色粘質土;5'と同質と思われるが、SX-1の下層の埋土か?礫を含む。
- 58.58'とほぼ同じだが小礫を含まない。 58.58よりやや暗く、若干の遺物を含む。

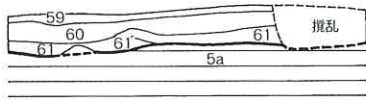
I L=50,000m B9区北側土層断面図



J L=50,000m B9区東側土層断面図

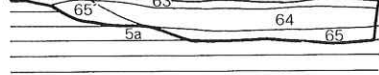


K ← L=50,000m B10区北側土層断面図 → K'



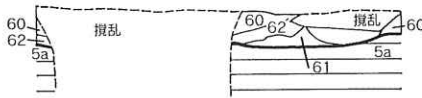
59. 赤褐色粘質土;45類と同質の土と思われる。  
 60. やや赤味を帯びた暗褐色粘質土;56類と同質の土と思われるが、やや赤味を帯びる。遺物を含む。SX-1、SX-2の埋土が広く分布した状態と思われる。  
 61. 黄褐色粘質土;58類と同質の土と思われる。SX-1、SX-2の下層の埋土か?  
 61'. 61よりも柔らかい。

M ← L=49,500m B11区南側土層断面図 → M



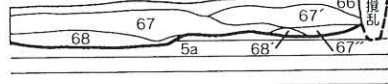
63. 赤褐色粘質土;59類と同質の土と思われる。  
 64. やや赤味を帯びた暗褐色粘質土;60類と同質の土と思われる。SX-2の埋土。遺物を含む。  
 65. 黄褐色粘質土;5と同質の土と思われるが、SX-2の下層の埋土。遺物を含む。  
 65'. 65よりも赤味を帯びる。遺物を含むため、SX-2の埋土か?

L ← L=49,600m B10区南側土層断面図 → L'



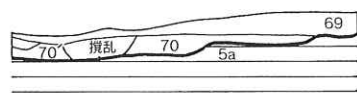
62. 赤褐色粘質土;5と同質と思われる。  
 62'. 60が攪乱された土。遺物を含む。

N ← L=49,500m B11区西側土層断面図 → N'



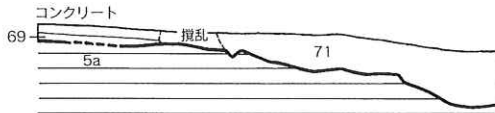
66. 赤褐色粘質土;63類と同質の土と思われる。  
 67. やや赤味を帯びた暗褐色粘質土;64類と同質の土と思われる。SX-2の埋土。遺物を含む。  
 67'. 67よりも赤味が弱く汚れている。 67. 67よりもやや汚れている。  
 68. 黄褐色粘質土;5と同質の土と思われる。SX-2の埋土。遺物を含む。 68'. 68とほぼ同じ。

O ← L=50,000m C11区北側土層断面図 → O'



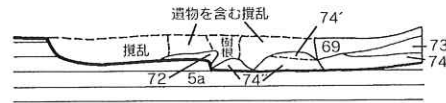
69. 農道による硬化面;赤褐色土  
 70. やや赤味を帯びた暗褐色土;64類と同質と思われるが若干汚れている。SX-2の埋土。  
 70'. 70よりも更に汚れている。

P ← L=50,000m C11区東側土層断面図 → P'



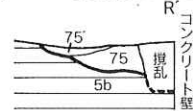
71. 攪乱;5aを掘り込む大規模な攪乱が続く。

Q ← L=50,000m C11区西側土層断面図 → Q'

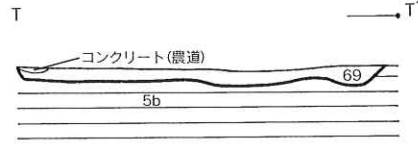
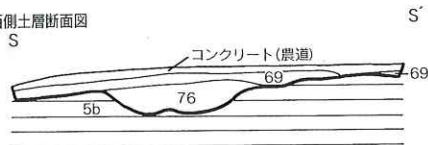


72. 黄褐色粘質土;5と同質と思われる。SX-1の下層の埋土か?は不明。  
 73. やや赤味を帯びた暗褐色粘質土;SX-1の埋土か?  
 74. 黄褐色粘質土;SX-2の下層の埋土か?  
 74'. 74より汚れる。 74'. 74より更に汚れる。

R ← L=50,000m B12区北・南・西側土層断面図

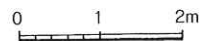
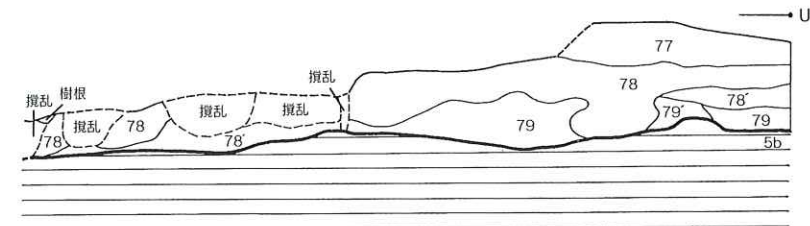
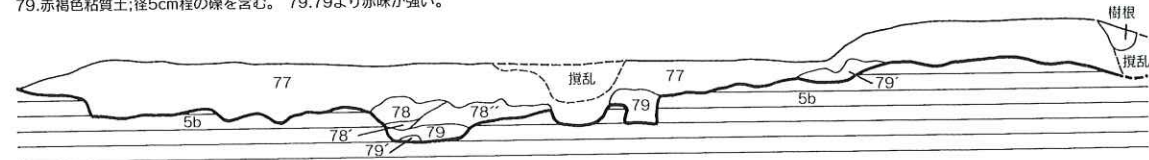


75. やや暗い茶褐色土;1号周溝の痕跡か? 75'. 75より汚れている。  
 76. 茶褐色粘質土;若干の礫、カーボンを含む。



U ← L=51,000m 境丘北壁土層断面図

77. 現耕作土;やや黒味を帯びる褐色土。  
 78. 茶褐色粘質土;やや黒っぽく汚れる。  
 78. 径2~3cmの礫を含む。 78'. やや黄色味が強い。  
 79. 赤褐色粘質土;径5cm程の礫を含む。 79'. 79より赤味が強い。



第7図 土層断面図 3

### 第3節 出土遺物

出土した遺物は、Noを付して取り上げた遺物が557点。その他に、攪乱土の中の一括遺物などがある。遺物の状態がかなり悪く、遺物の特徴を示す形で復元できたものは16点。完形状態に復元できたものは、僅かに1点。殆どの遺物は、口縁部、頸部、肩部、胴部、底部などの一部分を復元し得たに過ぎない。この16点について、実測・図化した。法量等は、出土遺物観察表に示した。

以下、小塚古墳出土の埴輪の編年的位置付けを、川西宏幸氏の編年<sup>21</sup>（山城を中心とする畿内編年）高橋徹氏の編年<sup>22</sup>に照らして考えてみたい。

1号周溝出土の実測No. 2、3は、外器面の剥落激しくうっすらとタテハケのみ確認でき畿内I～V期に相当。三角形の透孔は畿内I～II期に相当。丸形の透孔は畿内II～V期に相当。透孔は直向しておらず、一段に3個と思われ畿内I期に相当。また黒班も認められ、畿内I～II期に相当する。

実測No. 4は、1号周溝出土の円筒埴輪片で唯一、タガが現存している。上辺が内彎し、稜が鋭角的で突出度が高く畿内I～II期の特徴に合致する。

実測No. 16は、攪乱土の中からの出土であるが、タガと透孔が現存している唯一の例である。三角形の透孔は畿内I～II期に相当。タガの断面は、台形を呈し、突出度はやや弱く畿内II～V期に相当し、1号周溝のものと同時期と思われる。

実測No. 2、3、4、16は川西編年畿内I～II期（4c中葉～4c後葉）にあたるが、九州における埴輪の出現は、畿内よりも遅れ畿内II期に相当し、1号周溝出土の円筒埴輪の時期は、4c後葉以降であろう。高橋徹氏の編年では、九州における円筒埴輪の出現はII期（4c後半～5c初頭）と想定され、川西編年と整合する。

次に、壺形埴輪の編年的位置付けを、高橋編年で考えてみたい。

高橋編年I期の壺形埴輪は、焼成前に底部穿孔が為されており、焼成後に底部穿孔が為される供献土器と一線を画す。墳丘を圍繞する埴輪としては壺形埴輪が先行し、この段階では円筒埴輪は知られてい

ない。器形は、二重口縁と直口縁のものとあり胴部は球形に膨らむ。二重口縁の口径は、胴部の最大径とほぼ同じものもあり、2/3程度のものもある。直口縁のものは口頸部が大きく開くものと小さく開くものとある。口径が胴部の最大径とほぼ同じ大きさを持つものも見られる。

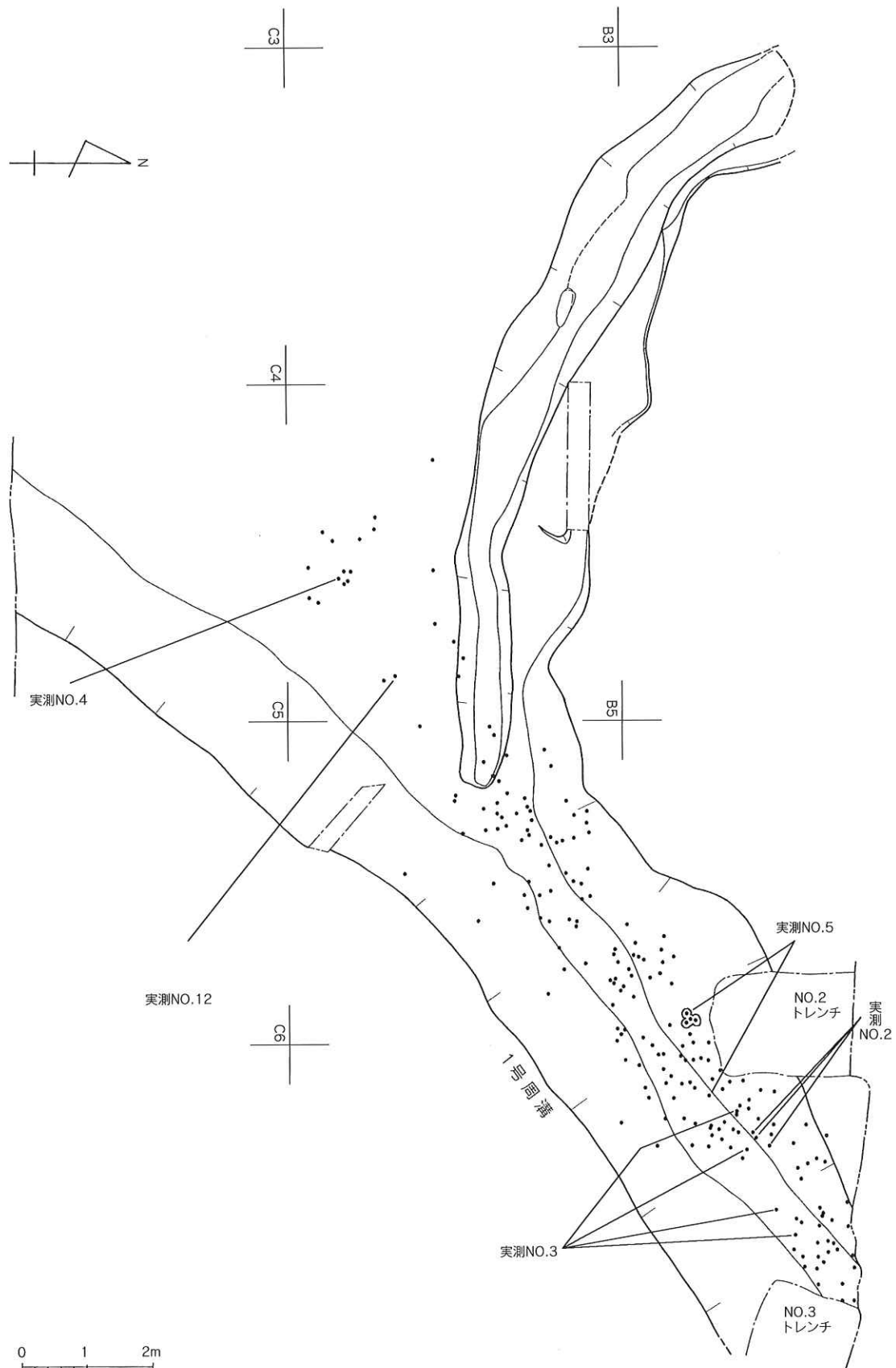
II期において、円筒埴輪が登場する。この時期の壺形埴輪は、福岡県老司古墳<sup>23</sup>にかなりの資料が見られる。口縁部はI期と同じく二重口縁と直口縁のものがセットで出土する。I期のものに比して口縁頸部が発達し、口径は胴部の最大径よりも大きい。胴部はI期のものに比して細くすぼまり卵形を呈し胴部最大径が胴部中央部にあるものと胴部上方にあるものとある。底部は、細い粘土紐を巻き上げて成形し、平底状のものと、やや直立し外反しながら胴部を形成するものがある。

上記のI期・II期の特徴を踏まえて、SX-1、SX-2出土の壺形埴輪を見てみたい。

実測No. 1は唯一の完形状態の資料である。器形は老司古墳のものに似てII期の特徴に合致する。二重口縁は2タイプ見られる。実測No. 1、9、14は、頸部から口縁部にかけての受部が、外見上ほぼ水平であるが断面形は緩い三角形を呈し、弥生後期に見られる、肥後タイプ<sup>24</sup>に似ている。老司古墳のものには見られないタイプである。実測No. 10は、高坏の坏部に似て、口唇部から下端部にかけて均一な厚みを持ち、口縁部下半は丸味を持つ。2タイプともに径が大きくII期のものと思われる。実測No. 1、11、13の頸部は、ほぼ直立するものと、やや中央部が膨らむものがあり、径の大きさからII期のものと思われる。底部は、実測No. 1、7、15はII期の特徴を備え焼成前底部穿孔である。実測No. 6やB10区出土の実測No. 8は底部径がかなり広がり、器形の変遷を窺わせる。

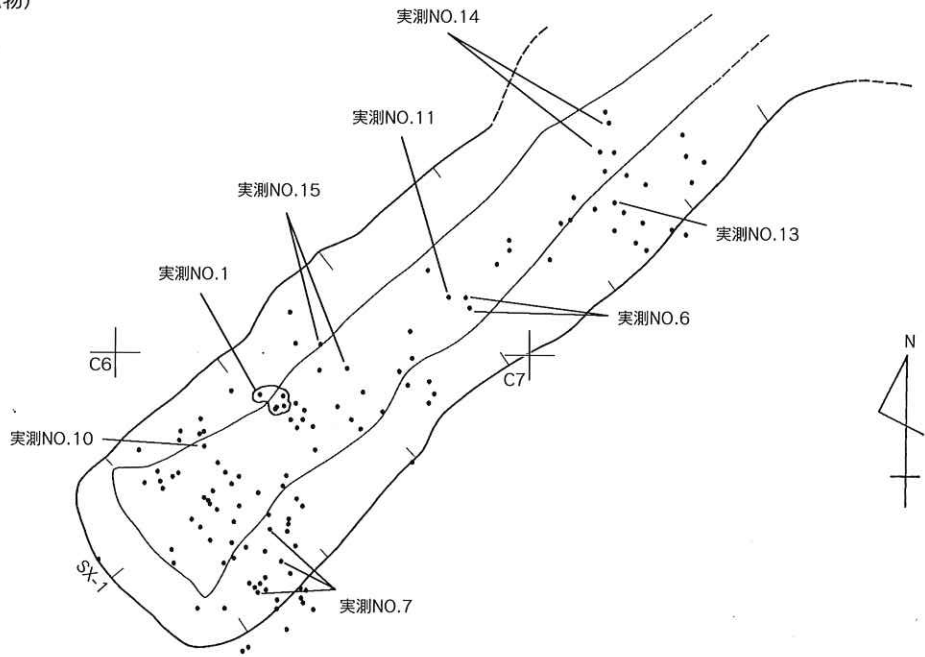
1号周溝出土の実測No. 12が直口縁の唯一の資料であるが、胴部との接点の径が判然とせず、I期II期の判断はつかない。

小塚古墳出土の壺形埴輪は、高橋編年の時期設定に従えば、4c後半～5c初頭に相当しよう。

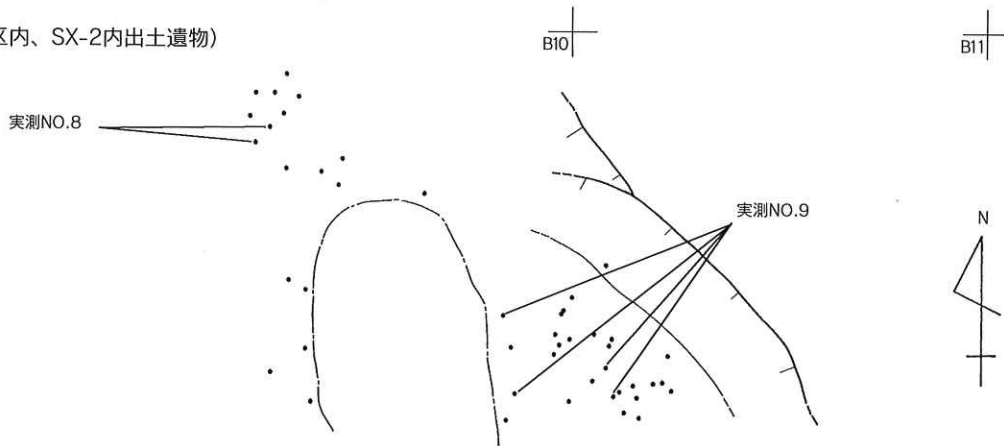


第8図 実測遺物出土分布図 1

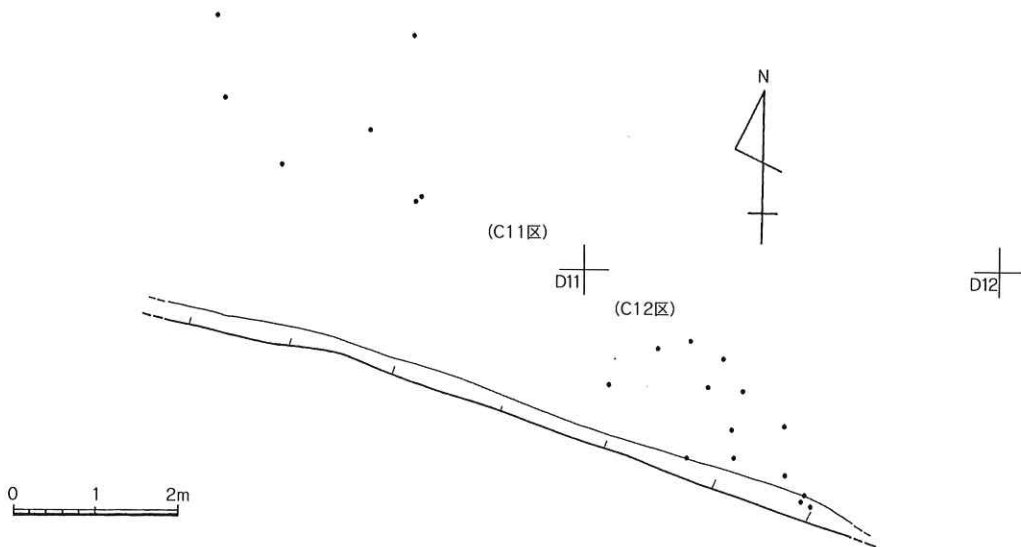
(SX-1内出土遺物)



(B10区内、SX-2内出土遺物)

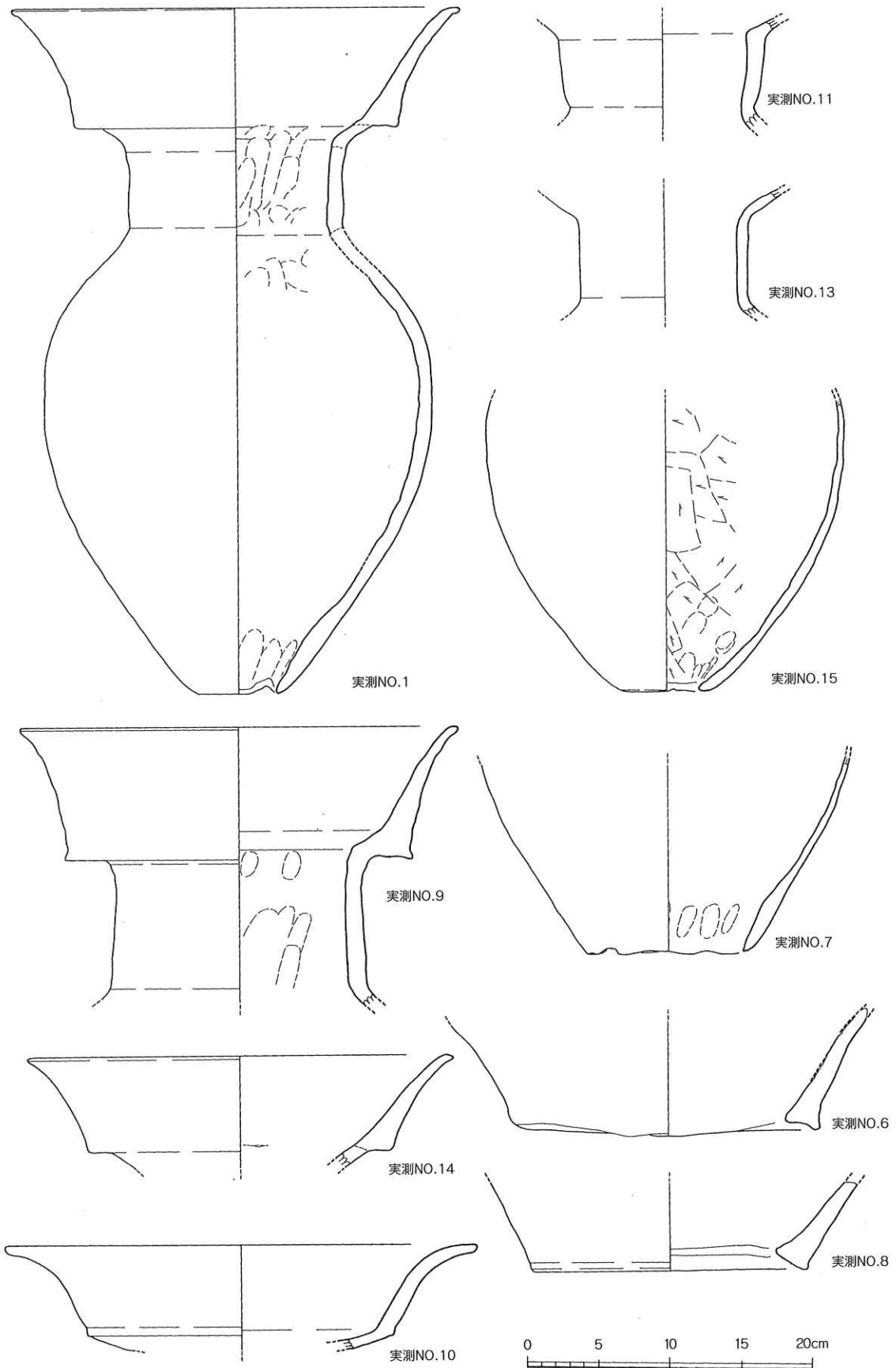


C11区内、D12区内出土遺物分布状況  
(実測遺物なし)

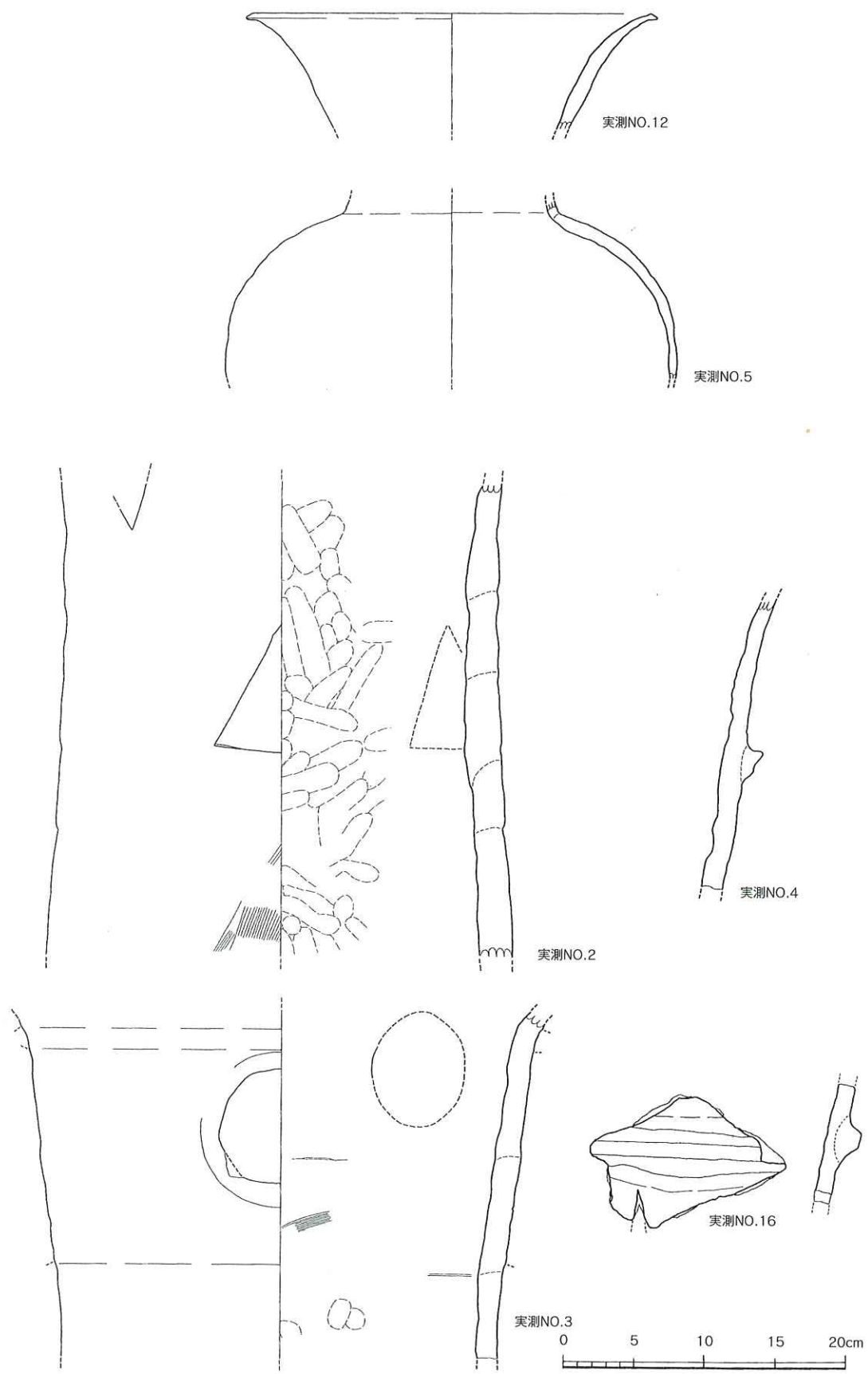


第9図 実測遺物出土分布図 2





第10図 遺物実測図 1



第11図 遺物実測図 2

第3表 出土遺物観察表1

実測No	遺構名	取り上げNo	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	焼成	残存率
					口径	底部	胴径	器高				
1	SX-1	121, 122	埴輪	壺形 (二重口縁)	31.6	5.6	27.6	47.8	にぶい 橙色	石英砂 長石等含む	やや不良	口縁部 1/3 胴部 1/2 底部 1/1
備考	口縁部～頸部の外器面の調整不明。頸部の内器面に指調整の痕跡がみられる。胴部～底部の外器面に、斜方向の「ク」様の痕跡が認められるが、器面が磨耗しているため、詳細は不明。内器面も、「ク」の可能性があるが、詳細は不明。底部の内器面に指調整の痕跡が認められる。底部に黒班が認められる。											
2	1号周溝	145	埴輪	円筒 (胴部)	—	—	—	—	橙色	砂粒 角閃石 石英等含む	やや不良	胴部 1/4～1/3 残存高 33.3cm
備考	透孔は三角形で一段に3個(?)段毎に頂点の向きが異なるようである。現存する透孔は3個で、内器面のは復元した。斜の痕跡は確認できない。外器面は磨耗激しく、部分的にうっすらと斜が認められる。方向は、右上がりも左上がりもある。内器面には、指調整の痕跡がみられる。透孔の下に、うっすらと黒班が認められる。											
3	1号周溝	28, 137 139, 145	埴輪	円筒 (胴部)	—	—	—	—	橙色	角閃石 砂粒等含む	やや不良	胴部 1/3～2/3 残存高 24.5cm
備考	透孔は円。1段に3個と思われる。透孔の周囲は沈線で丸く印がついている。現存する透孔は2個。透孔の高さがやや異なる(歪んでいる?)。斜は現存しておらず、貼り付け痕のみ認められる。外器面は殆ど調整不明。部分的に、うっすらと斜が認められる。内器面も部分的にうっすらとコウと指調整の痕跡が認められる。かすかに黒班が認められる。											
4	1号周溝	260	埴輪	円筒(?)	—	—	—	—	橙色	砂粒、長石 角閃石 石英等含む	やや不良	胴部 1/8以下残存
備考	外器面にかすかに斜方向の斜の調整が認められる。斜部分に強いコウがみられる。内器面に、コウやナ方向に調整痕の凹みが認められるが、工具については不明。黒班は認められない。											
5	1号周溝	193, 200 207	土師器?	壺?	—	—	32.1	—	橙色	砂粒、石英 長石 金雲母 赤色粒含む	やや不良	肩部 3/4 残存高 12.4cm
備考	歪であるため、復元は不正確。外器面にかすかに斜の痕跡が認められるが、詳細不明。内器面は剥落して調整不明。肩部のみの残存であり、器種の判定は困難。土師器か?かすかに黒班が認められる。											
6	SX-1	89, 90 104	埴輪	壺形 (底部)	—	21.4	—	—	橙色	砂粒、長石 赤色粒含む	やや不良	底部 3/4 残存高 8.8cm
備考	外器面の最下部に指調整の痕跡が認められる。内器面は、剥落が激しく、調整は不明。かすかに黒班が認められる。											
7	SX-1	8, 137 139	埴輪	壺形 (底部)	—	11.3	—	—	橙色	砂粒 長石含む	やや不良	底部 2/3 残存高 13.7cm
備考	外器面・内器面ともに器面剥落し、調整不明。内器面の最下部に指頭圧痕が認められる。かすかに黒班が認められる。											
8	B10区	8, 9	埴輪	壺形 (底部)	—	19.3	—	—	橙色	砂粒 長石含む	やや不良	底部 3/5 残存高 6.1cm
備考	外器面は、磨耗が激しく調整不明。内器面は、斜様の調整痕がかすかに認められるが調整不明。かすかに黒班が認められる。											

第4表 出土遺物観察表2

実測No	遺構名	取り上げNo	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	焼成	残存率
					口径	底部	胴径	器高				
9	SX-2	14、19 21、23	埴輪	壺形 (二重口縁)	31.0	—	—	—	橙色	白色砂粒 石英粒 砂粒をかなり含む	やや不良	口縁部1/5 頸部1/3 残存高 19.4cm
備考	かなり歪なため、径の復元は、実寸よりも若干小さめになった。外器面は、ナデと思われる調整痕がかすかに認められるが、磨耗が著しく詳細不明。頸部の内器面の上部に指頭圧痕が認められる。頸部の内器面の下部にヨコナデの後に指調整を施したものと思われる。かすかに黒班が認められる。											
10	SX-1	121	埴輪	壺形 (二重口縁?)	33.4	—	—	—	黄橙色	砂粒、長石 石英 角閃石含む	やや不良	口縁部1/5 残存高 7.3cm
備考	外器面、内器面とも磨耗激しく、調整不明。黒班は認められない。											
11	SX-1	89、121	埴輪	壺形 (頸部)	—	—	—	—	橙色	砂粒、石英 長石含む	やや不良	頸部2/3 残存高 7.8cm
備考	外器面、内器面ともに磨耗著しく、調整不明。黒班は認められない。											
12	1号周溝	252	埴輪	壺形 (単口縁)	29.4	—	—	—	黄橙色	砂粒、石英 長石含む	やや不良	口縁1/4 残存高 8.1cm
備考	外器面、内器面ともに磨耗しており、調整不明。緑部に黒班が認められる。											
13	SX-1	102	埴輪	壺形 (頸部)	—	—	—	—	橙色	砂粒 長石含む	やや不良	頸部1/3 残存高 8.8cm
備考	外器面、内器面ともに磨耗しており、調整不明。黒班は認められない。											
14	SX-1	157	埴輪	壺形 (二重口縁)	30.2	—	—	—	黄橙色	砂粒、長石 石英含む	やや不良	口縁1/4~1/5 残存高 7.8cm
備考	外器面、内器面ともに磨耗しており、調整不明。かすかに黒班が認められる。											
15	SX-1	122、123	埴輪	壺形 (底部)	—	6.5	25.2	—	にぶい 橙色	砂粒 長石含む	やや不良	底部1/3 残存高 20.2cm
備考	外器面はヘラケズリと思われるが、器面が磨耗していて、詳細不明。内器面は、ヘラケズリがかすかに観察される。最下端部に指調整の痕跡がみられる。											
16	4軸から 西側と思 われる。	攪乱土中一括	埴輪	円筒 (胴部の一部)	—	—	—	—	橙色	長石、石英 角閃石 金雲母含む	やや不良	胴部一部残存
備考	透孔の形は三角形か?透孔とタガを持つ唯一の例である。タガは台形を呈し、突出度はやや弱い。上辺、下辺は軽くナデが施されている。											

※取り上げはブロックで行ったため、別個体のものを含んでいる場合がある。  
実測No.10、11は、出土地点がかなり離れているが、同一個体の可能性がある。

## 第4章 まとめ

### 周溝について

今回の調査で、小塚古墳は周溝（SX-1、SX-2）を伴う円墳であることが、明らかになった。しかし、小塚古墳から見て北側にあたる1号周溝の性格については不明である。

SX-1、SX-2には、壺形埴輪のみ見られ、円筒埴輪は全く見られない。1号周溝では円筒埴輪と壺形埴輪が混在している。出土遺物の項で触れたように円筒埴輪は4c後葉以降に比定される。壺形埴輪は4c後半～5c初頭に比定される。遺物に明確な時期差は見られず、遺構の構築時期についても遺物の面から、時期差の判断は出来ない。

SX-1、SX-2には、円筒埴輪が含まれていないことから、小塚古墳の墳丘裾部に樹立していた埴輪は、壺形埴輪だけだったことが想像できる。

1号周溝に含まれていた円筒埴輪は、小塚古墳の墳丘裾部以外に樹立していたと考えねばなるまい。そこで、円筒埴輪がどこに樹立していたか、二、三の可能性を考えてみたい。

(1) 墳丘の項でも触れたように、小塚古墳の墳丘本体に盛土された形跡が少ないことから、1号周溝、SX-1、SX-2を掘った土を利用して1号周溝とSX-1、SX-2の間に外堤的な施設を築造して墳丘裾部と外堤上の埴輪の樹立状態に差違が生じた可能性。

(2) 1号周溝が経塚古墳に付随する周溝で、小塚古墳と経塚古墳で埴輪の樹立方法に差違が生じた可能性。この場合、経塚古墳は前方後円墳か帆立貝式の古墳の可能性はある。

(3) 小塚古墳と経塚古墳の間に別の古墳があり古墳築造に時期差があり、埴輪の利用法に差違が生じた可能性。

以上の3点が予想される。現時点では、(1)が最も可能性が高いと考えられる。(3)の場合、1号周溝を小塚古墳と別の古墳が共用していた可能性も考えられるが、現在では別の古墳の存在を示唆するような墳丘も遺されておらず、ミカン畑として平

坦な状態に削平されている。1号周溝の性格を明らかにするためには、調査区北側のミカン畑の下に遺されているであろう遺構の調査を待つ必要があり将来の課題として遺しておきたい。

### 壺形埴輪について

次に、小塚古墳を特徴づける遺物として壺形埴輪が挙げられるが、熊本県内の壺形埴輪の出土例と照らし合わせてみたい。

(1) 院塚古墳（玉名郡岱明町）<sup>25</sup>は、4c末～5c初頭<sup>26</sup>に比定され、菊池川下流域の前方後円墳で最も古い。院塚古墳の壺形埴輪は、二重口縁と直口縁のものがある。直口縁のものは、口径が胴部の最大径の約2/3で、胴部は卵形を呈す。二重口縁のものは、口径が胴部の約3/4で、胴部は直口縁のものより膨らむ。器高は直口縁のものがやや大きい。底部は両者ともに焼成前に穿孔されている。高橋編年Ⅰ期・Ⅱ期にあげる壺形埴輪の特徴と合致しない点もあるが焼成前底部穿孔、前方部の墳丘裾部、後円部の墳丘裾部および墳頂から出土している点を考慮して、壺形埴輪と考えたい。尚、円筒埴輪、朝顔形埴輪などは確認されていない。

(2) 長目塚古墳（阿蘇郡一の宮町）<sup>27</sup>は、5c前半<sup>28</sup>に比定され白川上流域の中通古墳群では最も古いものと考えられる。長目塚古墳出土の埴輪は、報告書ではA～D類に復元・分類されている。C類のものが<sup>3</sup>、高橋編年Ⅱ期の特徴を備えるが、直口縁のものしかない。原図にあたり二重口縁の口縁部（小塚古墳・実測No. 10と同タイプ）があり、直口縁と二重口縁がセット関係を持つという、高橋編年を裏付けるものと思われる。C類以外のものはタガヤ透孔を持ち、朝顔形埴輪に近いものと想像される。

(3) 宇土半島基部の前方後円墳で、弁天山古墳（宇土郡不知火町）は、4c中頃<sup>29</sup>に比定され、底部穿孔壺が確認<sup>28</sup>されている、スリバチ山古墳（宇土市）は4c後半<sup>29</sup>に比定され、墳丘くびれ部付近

で底部穿孔壺形土器列が確認<sup>218</sup>されている。両古墳とも、円筒埴輪、朝顔形埴輪は確認されていない。

(4) 高塚東原遺跡(八代郡竜北町)は、時期は不明であるが方形周溝墓の溝から、底部穿孔壺が確認されている。

弁天山古墳の調査<sup>219</sup>に当たられた富樫卯三郎氏は弁天山古墳出土の遺物を、院塚古墳、高塚東原遺跡出土のものと比較されている。三者とも、胴部が球形よりもやや長く、頸部はほぼ直立する。口縁部は高塚東原遺跡、弁天山古墳のものは二重口縁で口径と胴部最大径はほぼ同じである。底部は、高塚東原遺跡のものは焼成後穿孔であるが、弁天山古墳、院塚古墳のものは焼成前に穿孔している。富樫氏は、弁天山古墳、高塚東原遺跡の両者は、底部を除き非常に類似しており、院塚古墳のものより古い様相を持つことを指摘されている。

弁天山古墳の壺形土師器は、器形や墳丘くびれ部北斜面の葺石上面からの出土という点を考慮して、壺形埴輪として考えたい。また、スリバチ山古墳出土のものも、弁天山古墳にやや遅れて築造されている点などから、壺形埴輪として考えておきたい。

以上のように出土例が少ないものの、熊本県下で壺形埴輪が出現した時期は、弁天山古墳の4c中頃の時期を考えたい。高橋編年Ⅱ期ともほぼ対応する時期であり、小塚古墳もこの時期を上限として考えておきたい。

## 古墳群として

次に、小塚古墳の置かれた環境を周辺古墳との関係で考えてみたい。

熊本県遺跡台帳によれば、天水町内では正法寺平古墳、久島古墳、塚の神古墳、塚の神西古墳、経塚古墳、経塚西古墳、大塚古墳、権現山古墳、呑崎古墳などが確認されているが、開墾に伴い消失したものもある。比較的原形を保ち、出土品の一端が知られている、大塚古墳、経塚古墳、小塚古墳、経塚西古墳を同一の丘陵に位置する一群の古墳群として考えてみたい。以下、仮に天水古墳群と称する。

### (1) 大塚古墳

小塚古墳の東方約400mに位置する。現在の直径は、東西軸で約60mの円墳で、4基の箱式石棺が埋設されていた。その内1基の箱式石棺内から内行花文鏡が出土したことが知られている。昭和39年に現地を踏査された乙益重隆氏の所見<sup>210</sup>によれば、土師器壺2個体分の破片を得たとある。うち1個体は焼成後底部を穿孔したもの、他の1個体は、頸部が直立し胴部が球形を呈した分厚いものとあり5c前半の所産と考える。現在この遺物の所在は不明であるが壺形埴輪であった可能性が考えられる。さらに、現在の平らかな墳頂部に舟形石棺の残骸(形式等不明)が遺棄<sup>211</sup>されており、主体部には舟形石棺が埋設されていたものと思われる。

### (2) 経塚古墳

小塚古墳の北側に位置する。現在の直径は、約50mの円墳で、昭和42年に玉名女子高校によって発掘調査された。直葬の舟形石棺内から、短剣1、外装付き短剣1、珠文鏡1、碧玉製管玉3が熟年男性人骨に伴い発見された。当時、発掘を指揮された帆足文夫氏によると、埴輪類は確認できなかったとのことである。しかし、発掘調査に先立って、現地を踏査された乙益重隆氏の所見<sup>210</sup>によると、墳頂近くに広口の壺形埴輪の残欠一括と古式土師器の壺形土器3個体分が採取されたとあり、4c末～5c初頭と考える。現在この遺物の所在は不明であるが、壺形埴輪の可能性が考えられる。(玉名女子高校の学内誌『白梅』所収の経塚古墳発掘報告の中で、帆足氏が壺形埴輪の破片について言及されている部分は、乙益氏の所見を踏まえられたものであろう。)

### (3) 経塚西古墳

小塚古墳の西方約250mに位置する。現在の直径は、約26mの円墳で、墳頂部に安山岩の板石があり主体部は箱式石棺と考えられる。出土品は不明である。

(1)～(3)に小塚古墳を加えた天水古墳群は円墳で一群を形成している。各々の古墳の時期差については、将来の調査に負う部分大きい。概ね、4c末～5c中頃の範疇に含まれると考えるが、主体部や副葬品など各々の古墳を比較する材料が乏し

いため、現状の状態から推測する。

先に触れたように、乙益重隆氏の所見<sup>註10</sup>によると、大塚古墳を5c前半、経塚古墳を4c末～5c初頭に比定されている。小塚古墳は、今回の調査で4c後半～5c初頭を考えている。立地的には、大塚古墳から、やや標高を下げながら経塚古墳・小塚古墳、経塚西古墳に至るため、大塚古墳が最も高い場所に位置する。現状での墳丘の規模は、大塚古墳が最も大きい。現段階では、経塚古墳・小塚古墳が大塚古墳に先行して造営された印象を持つ。

### 結び

壺形埴輪の項で触れたように、熊本県下で壺形埴輪もしくは壺形埴輪と思しき遺物が出土している古墳は、前方後円墳である。更に、その古墳が属する一群では最も古いか、古手に属する古墳である。

これは、埴輪が使用される初期の段階では、共猷土器から転用された壺形埴輪が主流であったことを想像させる。

しかし、天水古墳群の場合、円墳で一群を形成している。経塚古墳の舟形石棺内の副葬品を見るに、首長墓としての威厳を感じさせ、天水古墳群が前方後円墳を持たなかったことが、不思議に思える。

ここで、天水古墳群が前方後円墳を持たなかった理由について推測してみたい。

(1) 天水古墳群が前方後円墳を持つための外部勢力<大和朝廷?>との政治的な交流などの要件を欠いていた。

(2) 天水古墳群が外部勢力<大和朝廷?>からの政治的認証を必要とせず、結果として前方後円墳を核としない、独自の古墳文化を形成していた。

(3) 天水古墳群と菊池川下流域の前方後円墳を持つ勢力との間に政治的な支配・服従関係が存在し前方後円墳を持たなかった。

(4) 天水古墳群と菊池川下流域が同一の勢力範囲内(同一氏族?)で、単に地勢的な条件で天水古墳群中には円墳のみが造られた。

以上のような理由が推測できる。この問題は、天水古墳群を形成した人々の生活圏、生産基盤を考

る上で重要な問題を含んでいる。

(1) (2) は、天水古墳群の成立を考える上で意味合いの違いがある。外部勢力<大和朝廷?>に対して誼を通じながらも、前方後円墳を造り得る存在とは認知されなかったか、全く外部勢力<大和朝廷?>に対して独立した存在であったか。

(3) (4) は、菊池川下流域の勢力の中に含まれるという点では、同一の意味合いがある。しかし(3)は、菊池川下流域の勢力に、天水古墳群の勢力が隷属しているということである。(4)は、菊池川下流域の勢力と天水古墳群の勢力が同一の生産基盤を有する勢力(同一氏族?)で、前方後円墳を造営する地として、天水の丘陵が選ばれず、円墳が選択されたという意味である。

県内の古墳を概観するに、必ずしも水田耕作の適地に隣接して古墳が営まれていたわけではない。生産基盤を水稲にのみ限定すれば、生産に適した平野部と墳墓を造営した山地との乖離が問題になろう。静謐な場所に墳墓を求めることは理解できるが、生活圏からあまりにも離れた場所に墳墓を求めることは想像しにくい。とすれば、天水古墳群の周辺に生活圏があったことが窺える。縄文時代より人の暮らしを受け入れてきた天水の地であれば、海と山に依存した生産基盤が存在したのであろう。

天水古墳群の性格が、(1)～(4)のいずれに求められるのか、天水古墳群の周辺の発掘調査が進み、古墳時代の住居、集落などの在り方が確認されることが必要である。しかし、天水古墳群の周辺に海と山に依存した生活をしてきた集団が存在していたことは予想できよう。

菊池川下流域右岸の初現の前方後円墳である院塚古墳が4c末～5c初頭<sup>註6</sup>、左岸の初現の前方後円墳である山下古墳が4c末<sup>註6</sup>に比定されており、菊池川下流域と天水の丘陵には、ほぼ同時期に古墳が出現している。先に挙げた(1)～(4)のように天水勢力とも言うべき独立した勢力として古墳文化を受容したのか、菊池川下流域の勢力を經由して、古墳文化を受容したのかが、今後の解明すべき課題となろう。

註(参考文献等)

註1 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2

註2 高橋 徹 1992「九州」『古墳時代の研究』9雄山閣出版社

註3 福岡市教育委員会編 1989『老司古墳』

福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集福岡市教育委員会

註4 熊本県教育庁文化課 古森政次氏の御教示による

註5 熊本県教育委員会編 1965『院塚古墳調査報告』

熊本県文化財調査報告第6集 熊本県教育委員会

註6 高木恭二 1995「肥後」『全国古墳編年集成』雄山閣出版社

註7 熊本県教育委員会編 1962『阿蘇長目塚古墳』

熊本県文化財調査報告 第3集熊本県教育委員会

註8 高木恭二 1992「九州編」『前方後円墳集成』山川出版社

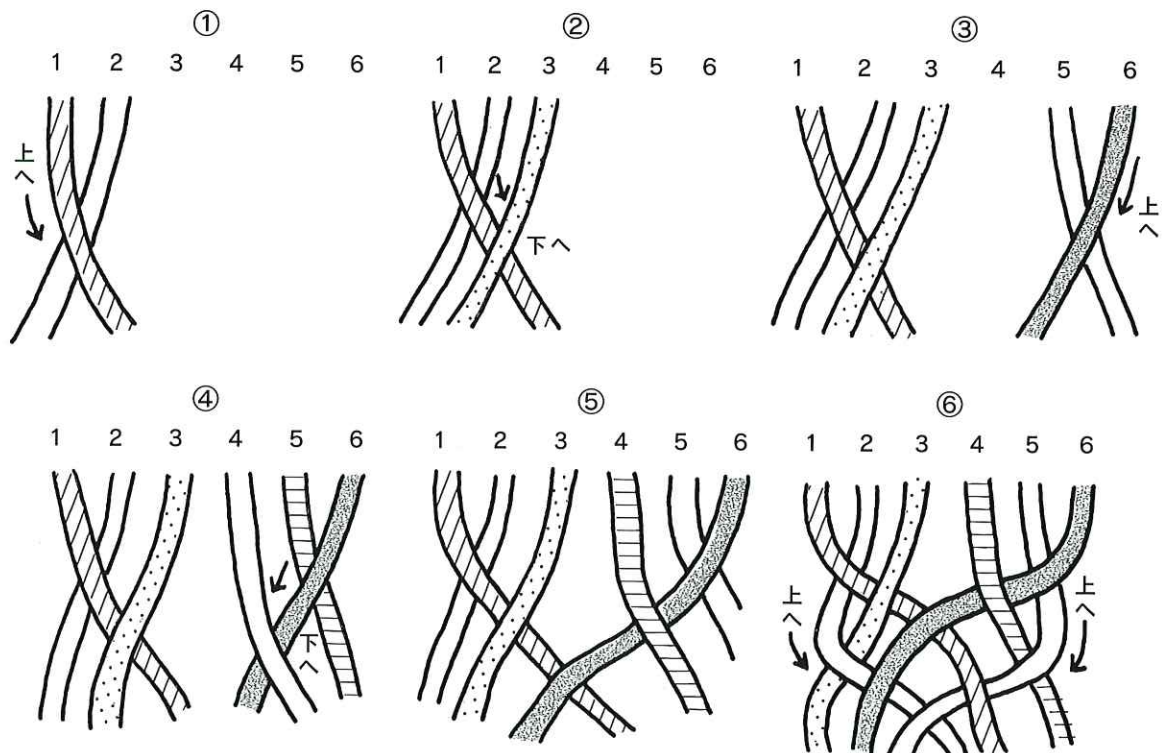
註9 富樫卯三郎 1966「弁天山古墳調査概報」『熊本史学』第30号

註10 乙益重隆 1983「肥後古鏡聚英」『肥後考古』第3号肥後考古学会

註11 宇土市教育委員会高木恭二氏の御教示による

その他、熊本県教育庁文化課並びに文化財  
収蔵庫の方々には、様々な御教示を頂いた。  
記して、深甚の感謝の意を表します。

## 付編 経塚古墳報告～剣の外装に残る紐の組み方(図解)





## 付編 経塚古墳発掘報告

本編で触れた、天水古墳群（仮称）の中で、唯一発掘調査が行なわれた経塚古墳の発掘報告を、玉名女子高等学校の御好意で、学内誌『白梅』第15号より漢数字を算用数字に変えた他は、原文のまま再録させて頂くこととした。30年前の熊本県の考古学黎明期に、手弁当で発掘調査に参加されていた方々の真摯な姿勢が伝わってくるような報告書である。

尚、第12図に示した出土遺物実測図は、熊本県文化課学芸員・帆足俊文氏に新たに実測を依頼し、文化課嘱託・三宅由華氏によるトレース図面を掲載した。舟形石棺の図面は原図を元に新たにトレースしたものを掲載した。短剣の紐の組み方の図解は、『白梅』所収の図を26頁にそのまま掲載した。

## 「経塚古墳発掘報告」

帆足 文夫

玉名女子高等学校社会部考古学班では昭和38年部結成以来、独自の古墳発掘調査をめざして、勉強に、更には視察調査ににと努力を行なって来ましたが昭和42年8月に、その努力が実って、全国でも珍しいケースとしての女子高校生による発掘調査を行なう事が出来ましたが、これはひとえに県文化財専門委員乙益重隆、田辺哲夫、三島格、各先生方の御指導のたまものであります。

考古学班は、昭和39年には甕棺の発掘、昭和41年には玉名高等学校考古学部と協同で小路古墳発掘等の発掘経験を積み重ね、その間には玉名地方の古墳、遠くは福岡県久留米方面の古墳等を実測して模型製作を行い模型点数も十数点数えるなど、毎日部の発展と部員の勉強に努力をしています。

以下経塚古墳発掘の経過を報告します。

## ～経過概要～

玉名郡天水町中心部より北方約2キロの地点に丘が連なり、丘頂からは横島村干拓地域が一望のもとに展げ、春から夏にかけては青々とした水田が拡がり、海の向うには雲仙岳、島原半島が長く横たわり見るからに眺望まさに古人の墳墓の地としては絶好の場所と思われる。然し横島干拓以前の此の地は附

近の地名でも知られるように（例えば京泊、海賊島等）丘の麓まで海がせまり丘は金峰山の連山として玉名郡部田見まで長くすそを引き、海に面していたと思われる。この連丘には十数ヶの遺跡が確認され大塚、小塚、米山、経塚の各古墳と多数の貝塚遺跡が分布している。今回発掘が行なわれたのは、その中の経塚古墳と称されているものであるが、名称はどちらの（経・京）塚といわれているのか、土地の人達もさだかではないのである。

この古墳は昭和36年、山地主である川田良之助氏がみかん園に改良造成するため丘頂附近を開墾中地表下60センチメートル位の所に、石びつのようなものを発見し、それが何であるかがわからず、棺蓋の部分だけ露出させ、自動車用ジャッキで蓋を開いてみたところ完全な形の人骨一体が発見され、その他副葬品と共に埋葬されていることが判り、直ちに丘頂の部分は開墾工事を中止して、元のとおり土を被せて石碑を建立したが、人骨がそのまま、石棺の中にあるとは言え、放置されている事に心配された川田良之助氏より玉名女子高校社会部に連絡があり、直ちに玉名女子高校社会部で現地確認を行なったところ、棺蓋は家形石棺の形をしたものを確認し昭和41年8月発掘調査を県文化財保護委員会に申請したが県の指導調査委員、更には諸般の事情により発掘調査が延期され、翌昭和42年8月発掘調査のための法的手続きを取り、8月21日より8月26日までの日程で発掘調査を行なった。

日程としては、8月22日鍬入れ式、石棺露出作業、8月23日開棺、8月24日副葬品の実測、人骨採集、8月25日副葬品の実測、8月26日土器の採集、である。これについては熊本県文化財専門委員、乙益重隆、田辺哲夫、三島格氏の指導により玉名女子高校社会部が発掘に当り、協力校として熊本県立玉名高校考古学部、その他有志の協力を得て調査の成果を挙げる事ができた。

これら好意ある御協力に対して深甚の謝意を表するとともに、土地所有者、川田良之助氏、並に関係の方々の御協力に対して、厚く御礼を申し上げる次

第である。

### 古墳の地理的位置

この古墳は熊本県玉名郡天水町部田見城の平1、213番地の13にあり、地主は立花の川田良之助氏である。当天水町は旧小天村と旧玉水村が町村合併して出来たものであり、隣村の河内とともに「熊本みかん」として全国的に知られたみかん地帯であり県内は勿論、北九州、阪神、東京方面にまで出荷されている。なお当村は、一方（西南方面）を有明海に面し、東南方から連なっている金峰山系が尾を引いており、二の岳、三の岳の頂上付近まで等高線式に開かれたみかん園となっている。

この古墳は、この山系のなかにある三の岳の連峰が西に長く山陝を引いた立花および部田見の丘陵の頂部を利用した円墳で、標高50メートルのところにある。

ここも三年前までは単なる雑木林であったが手鋸開墾により、全山みかん園となっている。古墳の周辺には、東方に歴史時代の立花貝塚（鎌倉期のもの）、また、この部落の北方320メートルの地には丘陵の頂部を利用した大塚古墳がある。

これは昭和35年に田辺哲夫氏（県教委指導主事・県文化財専門委）、乙益重隆氏（熊女大教授、県文化財専門委）が、開墾の際に明らかにしたが、箱式石棺数十基、内行花文鏡、ツボ形埴輪の残骸が明らかにされている。

更に最寄りの東南方には小塚古墳（直径9メートル、高さ4メートルの円墳）がある。

また西方50メートルの地点に円墳が二つほどあるが、これらの古墳は未調査である。なおこのほか斎藤尾古墳、尾田部落の尾田貝塚などがある。

このように、この附近は貝塚、古墳が非常に多く分布する地域であるが、特にこの古墳は当時の豪族の一人にふさわしく、有明海、そのむこうにそびえる雲仙岳などの絶景がみられ、人々がこの丘陵の頂部に埋葬したことがよく理解できる。また、このふもとは現在、玉名と熊本を結ぶ主要幹線道路が走っており、江戸時代に京にのぼる際に宿をとったという「京泊」の名も、附近の横島村に残っており歴史

をさらにさかのぼった当時においても、ここは交通の要地であったことが推測される。なお阿蘇外輪山の西麓に水源を發して玉名平野のデルタを貫流する菊池川も、1589年（天正17年）から1605年（慶長10年）に高瀬から大浜（左岸）と高瀬から滑石（右岸）に約5キロメートルの堤防が築かれて流路が変更されるまでは、部田見のふもとを流れる唐人川の流路を流れていた（光文館発行、熊本県の地理—著者代表、岩本政教氏）ことが明らかであり、河川、平野、山麓海岸と四拍子そろった当地が当時の生活の中心であったことは明白であると思われる。

### 遺跡編

#### 1、古墳

この経塚古墳は、大塚、小塚の古墳を結ぶ三角形の一角にあり、丘は直径約東西15メートル、南北21メートル、高さ約5メートルの丘頂を利用した円墳であるが、最近のミカン園造成のため、盛土と自然の山との区別はできないが、自然の山を変形加工して円墳にしたものと推測できるのである。古墳全体の特徴としては、東の部分が若干けずられて曲線部が変形し、封土は五段の階段状をなしているがもとは秀麗な丘だったという事が、古くこれを調査された県文化財保護委員乙益重隆、田辺哲夫両氏の調査によって明らかにされている。

石棺の埋葬点は墳頂の東端に位置し、先述した如く地表下60センチのところに埋葬されていたことなどは、或いはミカン園造成に際して墳頂を削り丘全体の形を整えるため両方に土を移したものと考えられる。

墳頂は平らかであり、松、椿が植えられ、墳頂面積25平方メートルの広さに石棺が一基しか埋葬されていないのは不釣合いな感じがする。或いはまだ埋没しているのかも知れないがこの事は立木のためはつきり調査することは出来なかった。

又、葺石は原形破壊が激しいため発見出来ないが周濠には周囲の調査で、壺形埴輪の破片が多数発見出来る。完全なものはないが原形の推定は可能である。

## 2、古墳の内部施設（石棺）

封土を除去すると、古墳の内部には、巨大な舟形石棺が埋納してあった。この石棺は阿蘇溶岩を彫刻し、それを入念に砥石で磨き上げたもので、全長2.3メートル、縄掛突起を含めると2.8メートル高さ1.5メートルのもので、地表に引き上げる際2トンのチェーンブロックを使用した。棺身と棺蓋を別々に引き上げなければならない程の巨大さを持っていた。この事は、九州に於けるこの種の石棺としては、最大級のものと言えるようである。厳密には、棺身は、長さ2.34メートル、巾0.85メートル（頭部）、0.73メートル（足部）、低面までの高さ0.67メートルで、全体の形としては、舟形を呈しており、周囲には、舟ペリが彫られていて、又、棺身内部に巧妙に作られた造り付けの石枕がある。棺蓋は長さ、2.37メートル、巾0.85メートル（頭部）、0.73メートル（足部）、高さ0.8メートルで棟の部分が平らかで切妻の家型をなして、両側の斜面の部分には、窓状の切枠が二面づつ彫り込まれていた。従って、棺身は、舟形であるが、棺蓋は、むしろ家型と呼ぶにふさわしい石棺という事ができる。

この石棺の特徴として棺蓋、棺身とも縄掛突起が特に大きいことであり、縄掛突起の付根の部分には紐づれた痕跡が、はっきりと認められ、この石棺を埋納するために紐を利用した事が考えられる。

又、この石棺を安置するには、現地表下、2メートルの比較的深いところに、ほぼ南北方向（北枕）に埋納され棺身の位置を安定させるため床にきれいな海砂を約6～10センチメートルの厚さに敷きつめ棺身の底部を生粘土、厚さ20～30センチメートルで固めている。

## 3、石棺内部の遺物埋納状態

棺身内部は全面に亘って、厚く丹粉を塗り、棺底には粘土を約6センチばかり敷きつめて床としており、その上に、成人男子の人骨が、一体安置されていた。

人骨は両手、両足を伸展葬にして、整然と安置されて、保存状態は比較的原形に近いものであった。

頭骨は埋納されたままの状態で石枕の上にあった

が、棺底から石枕上表面までの高さが約15センチあるため、頭部との調整をとる必要上から粘土を敷いたものと考えられる。石枕は縦24センチ横31センチのやや丸みをもったもので、頭部をのせる部分が約3センチの凹みがつくられている。

副葬品は人骨の左枕辺に短剣一振（全長28.5センチ）があり、更に右の上膊骨に沿って、外装のよく残った短剣一振（全長42.1センチ）が置かれていた。

その他人骨の首まわりには碧玉製の管玉三箇、首の左横に白銅製の鏡が一個鏡面を上にして置かれてあった。

鏡背には布が繙着していて、その布は平織の絹かと思われるが、死者の衣類が付着したとも考えられいずれかははっきりわからない。又、鏡の鈕には紐がついていたことが、その残滓からみることができ

## 遺物編

《概観》この古墳の石棺内部からは、短剣二ふり、玉三箇、鏡一個その他、封土からは埴輪の残欠が採集された。

### 1、鏡

この白銅鏡は、人骨の左鎖骨下に鏡面を上にして置かれていた。これは直径8.2センチ、厚さ2～3ミリ、反りは2～3ミリを有し、鏡背は紐のまわりに細粒子文帯を8ブロックから構成したものである。

このような鏡は、仿製鏡である事は言う迄もないが、外区は巾1.3センチの平縁で作られている。その鑄造にはやや鑄くずれが見られ、鈕の部分には絹房らしい繊維が、たばをなして繙着していた。これは形も比較的小さい方で実用より祭祀用に使ったものと思われる。

### 2、管玉

この三個の管玉は、いずれも碧玉製で、①は直径7ミリ、長さ36ミリ、②は直径6ミリ、長さ22ミリ、③は直径7ミリ、長さ23.5ミリのものである。いずれも平均2ミリの穴があけられ、なかには、両端からあけた穴に、ズレが見られるものもあ

る。

この古墳にとって、管玉三個というのは、いかにも数少ない観がある。この古墳の主はそれだけしかもっていないので、竹製のものを加えてさげているという推測ができるのである。

### 3、剣

剣は、二点出土したが、一点は人骨頭部の左側にあり、他の一点は人骨右上膊骨に沿ってあった。

左頭部附近の剣は腐蝕度が高く原形は、とどめてはいないが平根式の両刃の剣で、柄の部分には布状のものが付着している。

右上膊骨附近の剣は大体に於て原形を止めていた剣の出土品としては見事なものであり貴重な出土品として注目される。この剣は、図に示すように柄、鞘ともに木製の部分も「ひも」の部分も完全な形をして居り柄には、白銀板を巻きその上を「ひも」で巻きあげたものである。

～剣の外装に残る紐の組み方～

石棺内から発見された二ふりの剣のうち、片方には、資料として比較的残存しにくい紐が、その側面に巻きつけられていた。

これは絹と思われる繊維が二本、軽くより合わされ、それらを六本使って二列の三つ組み状態に編まれている紐である。又、紐の色は茶褐色に変色していて、もとの色が何色であったかはわからない。

道明新兵衛氏の著書「ひも」を見ても紐が稀に麻木綿製、多くは絹製でできており、短い細いものだから滅びやすく、「奈良平安時代の古い紐など、いくらか残っていない。」と述べられている。又、縄文土器の場合は、ひもが文様を施すための用具として利用されている事を考えると、この紐は刀の紐としての役目を持つ組紐の資料として貴重なものと思われる。これは、やや腐蝕して固くなってはいるが古墳中期に既に手のこんだ組紐のあった事実を示すものとして特筆する次第である。以下は、その組み方の図解である。(26頁参照)

### 結び

玉名地方は菊池川流域に於て古墳時代の一大文化圏を形成して学界の注目を集めてきたが、この経塚

古墳も菊池川の川尻の丘陵地帯にあり先述のごとく菊池川、有明海、丘陵と地理的には恵まれた環境として古代人の墳墓の地には最適であった事は十分推測できる。

経塚古墳の東隣りの丘には大塚古墳があり箱式石棺が数基出土しており、内行花文鏡一点(県文化財専門委員乙益重隆氏調査)が発見されている。更に南隣りの丘には小塚古墳があり陪冢であろうと考えられている。

これら一連の古墳の中で正式に調査されたのは、経塚古墳であるが、調査結果からみて古墳中期のものと考えられる。

しかし、調査の結果は巨大な石棺が、家形と舟形の混合形態である事、人骨が完全な形でミイラ化して発見された事、更に剣が外装を原形のまま出土した事等、今後古代人の人体上の研究、又、古墳時代の文化史解明に重要な内容をもつものとして今後大きく期待をかけるものである。

又、剣については我国古代史研究資料として貴重なものである。

### 調査団の編成

△主体 熊本県玉名女子高等学校社会部

△協力 熊本県立玉名高等学校考古学部

### △組織

◎責任者 玉名女子高等学校教諭 帆足 文夫

◎指導 熊本県文化財専門委員 乙益 重隆

熊本県文化財専門委員 田辺 哲夫

熊本県文化財専門委員 三島 格

熊本県玉名市文化財保護委員会副会長

田添 夏喜

◎調査員 玉名高等学校教諭 卯野木 盈二

玉名女子高等学校教諭 平島 清春

玉名女子高等学校教諭 松本 佑一

玉名女子高等学校教諭 粟津 晴美

◎協力者 県立熊本商業学校教諭 西沢 八朗

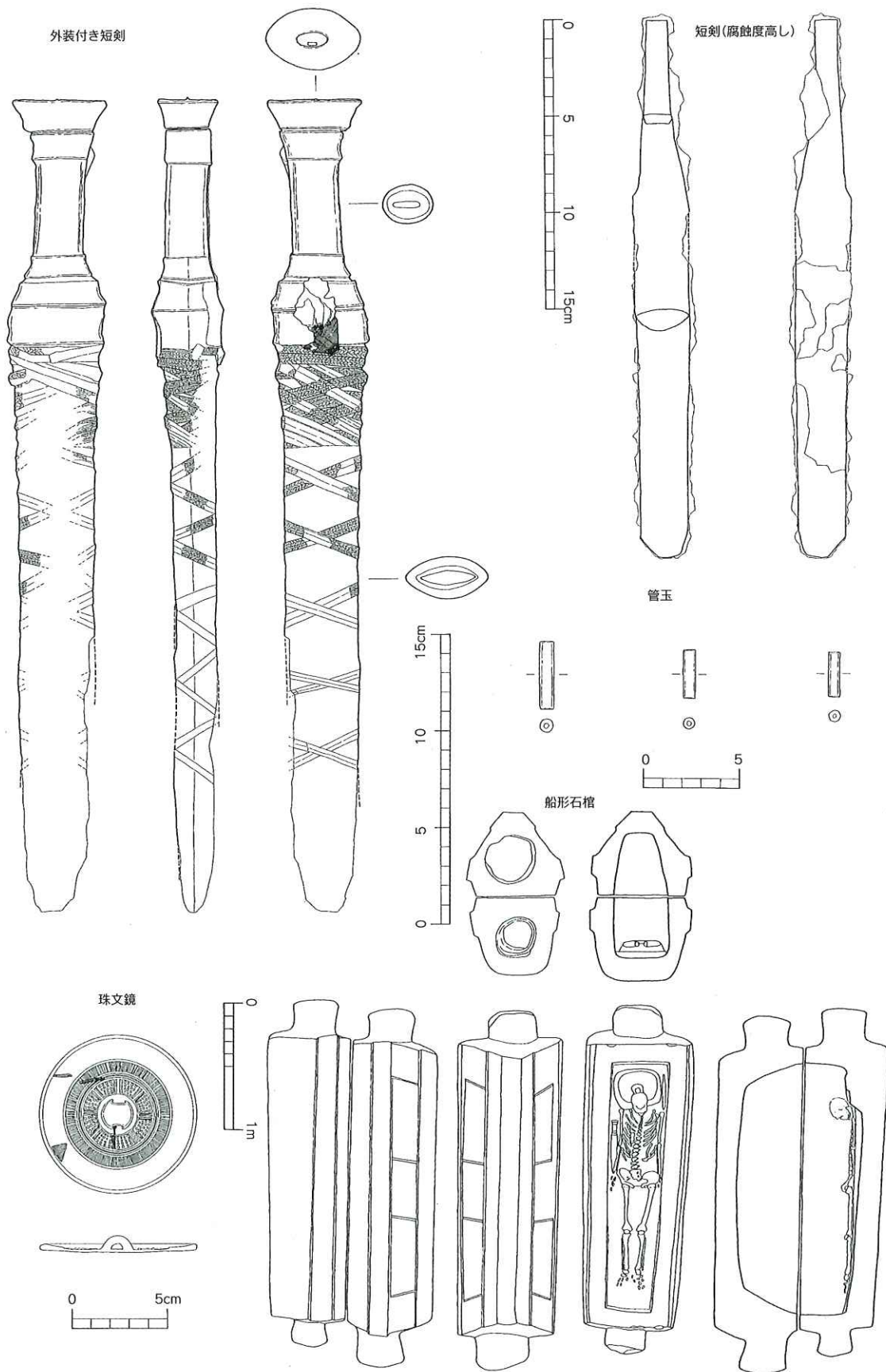
玉名女子高等学校教諭 菅 寿光

第十五号 白梅(祝賀特集号)

昭和42年12月23日印刷 12月28日発行

編集者 玉名女子高校文芸部

発行者 玉名市玉名女子高 坂田 新



第12図 経塚古墳出土遺物実測図

報 告 書 抄 録

ふりがな	こづかこふん							
書名	小塚古墳							
副書名	平成8年度県営三の岳地区一般農道整備事業に伴う埋蔵文化財調査							
巻次								
シリーズ名	天水町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	中川裕二							
編集機関	天水町教育委員会							
所在地	熊本県玉名郡天水町大字小天7237-1 TEL0968-82-3570							
発行年月日	西暦 1997年8月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こづかこふん 小塚古墳	くまもとけんたまなぐん 熊本県玉名郡 てんすいまちおおあざへたろ 天水町大字部田見 じょうのひら 城ノ平	43363	未定	32° 52' 14"	130° 35' 24"	1996年 12月2日 ～ 1997年 3月18日	500	道路建設に伴う、埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小塚古墳	古墳	古墳時代  4世紀末～ 5世紀前半	周溝	埴輪  壺形埴輪  円筒埴輪		円墳に付随する周溝を確認。二重に巡っている可能性がある。  ほぼ完形に復元できる壺形埴輪が出土した。  三角形の透孔を持つ円筒埴輪が出土した。		

# 圖 版





図版 1 天水古墳群(仮称)全景

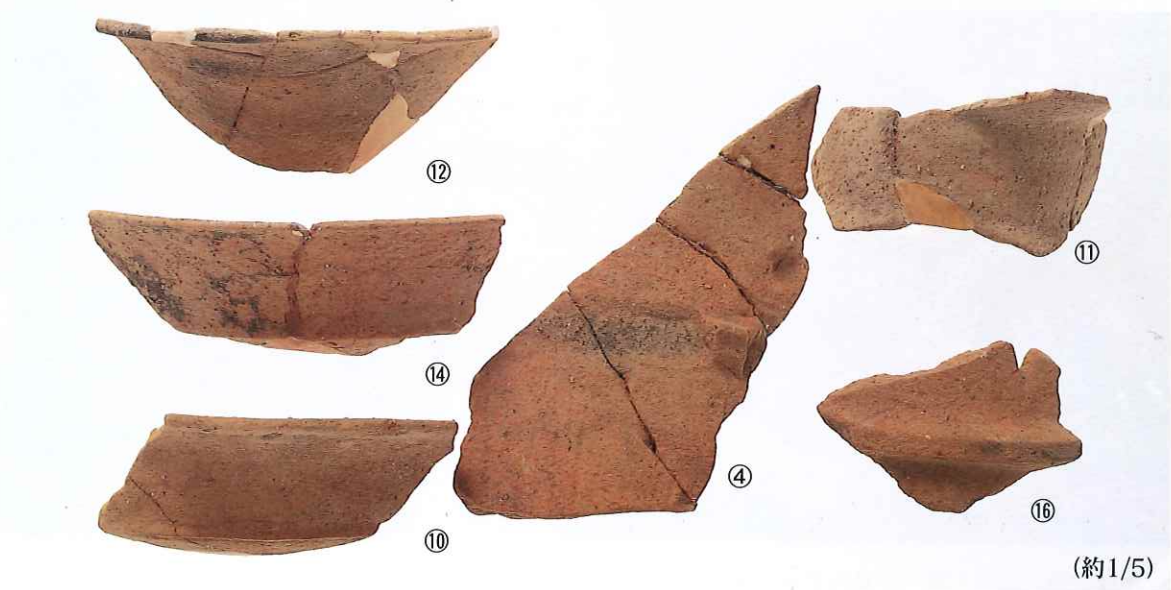


遠景・有明海を望む (古墳は写真中央部の丘陵上)

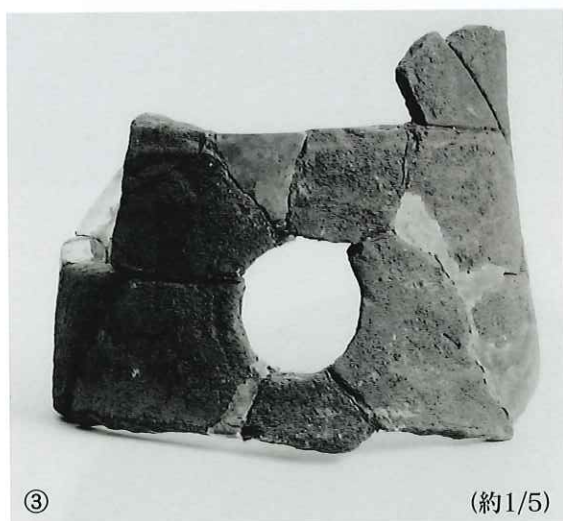


小塚古墳・経塚古墳 (写真右手が小塚古墳)

図版 2 小塚古墳出土遺物写真 (数字は実測No)



図版 3 小塚古墳出土遺物写真 (数字は実測No)



図版 4 経塚古墳出土遺物写真



- ①② 外装付き短剣(約1/3)
- ③ 短 剣(約1/3)
- ④ 管 王(約2/3)
- ⑤ 珠文鏡(約1.3倍)

図版 5 小塚古墳調査区堀削状況写真



北西から



北東から

図版 6 小塚古墳遺構写真



1号周溝 (写真左手上方から右手下方へ) 北西から



SX-1 南西から



1号周溝（A6区内）南東から



SX-1（Cトレンチ南側セクション・ベルト）南西から

図版 8 小塚古墳完掘状況写真



1号周溝 西側から



南西から (手前がSX-1)



天水町文化財調査報告書 第1集

## 小塚古墳

発行日 平成10年3月20日

発行 天水町教育委員会

〒861-5401

熊本県玉名郡天水町小天

TEL (0968)82-3570

FAX (0968)82-3904

印刷 (株)今村印刷

〒862-0976 熊本市九品寺5-9-6

